AATJ 2014 ANNUAL SPRING CONFERENCE PROGRAM

PART ONE

Philadelphia Marriott Downtown, Philadelphia, PA
Meeting Rooms 402/403, 404, 407, 408/409, 411 (Fourth Level); Grand Ballroom C (Fifth Level)
Thursday, March 27, 9:00 a.m.–5:00 p.m.

(Registration: Fourth Level)

Papers whose titles appear in Japanese in the program will be delivered in Japanese; those with only English titles will be delivered in English

9:00 a.m.–10:40 a.m. — Session 1

SESSION 1-A: PEDAGOGY PANEL [MEETING ROOM 402/403]

Chair: **Suyu Kuo**, University of Pennsylvania

Panel Title: **「日本語教育における言語、文化、アイデンティティの多様性」 (Linguistic, Cultural, and Identity Diversity in Japanese Language Education)**

世界を移動する人口は増加を続け、複言語・複文化の狭間に生きる人々は今や世界のあらゆる場所に存在する。このような現象は多岐に渡る分野で研究対象となっており、様々な研究者によって複言語・複文化の中で育つことが人々にどんな影響を与えるかが論じられてきた(西山、2010)。こうした国際社会において今後ますます多種多様な人々、文化、物の考え方が混在していくことを考えた時、教科書に規定された「正しい」言語・文化知識だけを受動的に享受するという従来の教育の在り方を考え直す必要があるのではないだろうか。

本パネルでは、上述した従来の日本語教育の問題点を見つめ直すため、まず、何事も二項対立的に記載されがちな日本語の教科書を批判的に分析し(久保田、2008)、クラムシュ(2009)の「第三の場所」と呼ばれる理論（自己と他者、両者の関係性の間に生まれる第三の場を軸に言語習得していく）を基に、言語、文化が我々の実生活の中でいかに様々な方法で理解され表現されているかを考察していく。そして、このような「言語、文化、アイデンティティの多様性」に着眼した日本語プロジェクトの実践例を３つ報告する。本パネルで取り上げる大学での実践例は、１）初級レベルでの「文化の多様性」について考えたブログプロジェクト、２）中級レベルでの「コミュニケーションの多様性」について考えたビデオプロジェクト、３）上級レベルでの「言語とアイデンティティの多様性」について考えた文学作品のプロジェクトである。各発表にて、プロジェクトの利点と課題点について言及した後、今後の日本語教育において、教師も学習者も多様な視点から目標言語や文化を探求していくことの意義を確認していく。

「日本語教育における第三の場所、第三文化、文化リテラシー」 (Teaching Japanese in intercultural context: Theory of Thirdness in Japanese pedagogy)
Yaeko Kabe, University of Maryland University College

近年、急速なグローバル化により、国やことばを超えて世界を移動する人口が増え、多くの複言語・複文化に生きる人たちの出現により、以前にもまして社会には多様な人々が混在している。そのような現状を踏まえ、クラムシュ(1993)は、外国語教育における「第三の場所」「第三文化」を唱えた。クラムシュにとっての「第三の場所」とは、教師が目標言語・目標文化のモデルを建てる際に、学習者の文化的・言語的習慣行動を組み入れる「場」のことである。また、「第三文化」の理論では、母言語と目標言語、母文化と目標文化、私たちと彼ら、自己と他己といったような二項対立軸を超え、それらを明確に区別するのではなく、すべての関係性の中で言語や文化を学んでいくということを重視している（Kramsch, 2009）。

また細川(2007)は、他者の文化を認識し、自らの文化との相違や接点を模索していく作業、それぞれの持つ固有文化を交流しあうことのできる能力を「文化リテラシー」と呼び、言語教育は「文化リテラシー」を形成するためにあるべきだと言う。そのためには、学習者の発見を重視する学習者主体の言語教育が必要となり、教師は「正しい日本語・日本文化」的な単一言語主義政策への順応を学習者に求めることなく、文化変容(他の文化との接触によっておこる元の文化の変化)のプロセスを重視し、学習者を育成するべきである。「第三の場所」「第三の文化」そして「文化リテラシー」を踏まえた日本語教育を行うためには、柔軟な授業デザインが必要となるだろう。本発表では、こうした「第三文化」の理論を踏まえて、学習者主体の授業を行うための理論背景について考察していく。

「初級日本語ブログプロジェクトを通して「文化の中の多様性」を発見、考察する」(Exploring and examining "cultural diversity" through a novice-level Japanese language learners' blog project)
Suyu Kuo, University of Pennsylvania

１９９０年代にアメリカの教育界における「ナショナルスタンダード」が開発されて以来、言語教育の場で文化をどのように指導するかが幾度となく議論されてきた。ナショナルスタンダードでは、自文化と他文化の類似性と差異の両方を理解することが理想的であるとされているが、久保田(2008)が指摘する様にこうしたスタンダードはある特定の文化を単一

または同質的な集団が作り上げたものとして捉えている危険性がある。そのため、教師は学習者にもっと多様な視点から文化的情報を探求、検証させる必要性があると考えられる。

以上の点を踏まえて、本発表では２０１２年の秋学期に東海岸の大学で行われた初級後半レベルの日本語学習者による「ブログプロジェクト」の実践報告をおこなう。本来このプロジェクトは、宿題、テスト以外の目的で日本語をもっと自由に使い、積極的に自分自身を表現する場を学習者に与えることを目的としていた。しかしながら、教科書や授業中に紹介された文化的情報のみにとどまらず、学習者が自ら進んで日本で短期留学した際に実体験した地方の文化の話、音楽を通して独自に学んだ日本文化の話などをブログ上で写真やビデオを交えて表現していた事実を受け、このプロジェクトは単なる書きのプロジェクトではなく、学習者に自ら文化的習慣、産物、思考の多様性を発見、考察させるためのきっかけを提供する可能性も秘めていることに気づかされた。実際のブログ記事、コメント欄での交流、プロジェクト後のアンケート、インタビューを振り返りながら、自文化と他文化を固定的かつ同質的なイメージで捉えようとする従来の学習方法を今後どのように脱構築していけるか示唆したい。

「コミュニケーションの多様性: 二大学間の協働ビデオプロジェクト」(Diversity in communication styles among language learners: A collaborative digital video project in cross-institutional settings)

Naoko Sourial, Baruch College, The City University of New York

ニューヨークは、世界の中でもより複言語、複文化が交差する社会ではないだろうか。ニューヨークにあるCUNY(NY市立大学)は、ニューヨーク市内に23のカレッジを有する公立総合大学である。CUNYの学生の背景（ethnic diversity）および学習スタイルは実に多様性に富む。日本語のクラスでは、英語が母語でない学生のほうが多く、多言語・多文化・多思想を背景に持った多様なアイデンティティを持った学生が混在する。教科書・文法中心のクラスでは、とかく「正しい日本語」、ことば・文化の「標準化」に（熊谷2008）向かいがちであり、そのような環境では、自己表現が困難な学生もいるかもしれない。教師は、様々なことばの間のまた学習者の間の差異を固定的に見ない(佐藤・ドーア2008)　姿勢の必要性を認識し、「学習者主体」(細川2002)の授業を重視した授業活動を目指した。

本発表では、上記の点に焦点をあて、2013年春学期にCUNY二校(シティーカレッジとバルーク大学)の日本語中上級クラスで行われた日本語教育の実践例「ビデオ制作プロジェクト」を紹介、報告する。互いの学校・学生生活を紹介するという課題を通し、様々なタイプのビデオ作品、異なる日本語使用から多様なコミュニケーションの形態が見られた。例えば、リポート・インタビュー・コメディーなどのビデオ、自分達で日本語で作詞作曲した音楽のBGM等、学習者が主体的に様々な形で自己表現した作品であった。本プロジェクトを通し、教師は、差異を固定的に見ず、学習者の興味・関心を高め、学生間、また学生と教師が体験や感情を共有／共感できる場を生み出すことができるような環境作りが「学習者主体」の授業活動のためには大切な役割であることも再確認した。

「日本語文学／越境文学の中・上級教材としての可能性：「第三の場所」発見を目指して」(Searching for the third space through Japanese language/transnational literature: What the new genre can offer students)

Naemi Tanaka McPherson, University of Hawai'i at Manoa

多様性、複文化、クリティカル教育といった言葉が新しい外国語教育理念として論じられる中、日本語教育においても批判的思考力や創造性を重視した授業実践が報告されている（熊谷 2008 , 小川 2007）。近年は日本語を外国語として初めて学ぶ学生の他、日本留学経験者、継承語話者、留学生、そして海外在留経験者など、日本をはじめそれ以外の言語や文化との接触を有する学生が増加している。そこで、日本語／日本文化と学習者の母語／母文化という枠組を越えた多様性のある視点が、日本語教育においても不可欠になると考える。これはクラムシュ(1993)が提唱する「複言語」「複文化」社会に生きるコミュニケーション能力（Kramsch 1995）の育成につながる。

本発表は、留学、長期日本在留、国内外移動経験を有する多様な学習者が集まった米国東海岸の私立大学上級コースでの実践報告である。リービ英雄、楊逸、水村美苗、李良枝など、非母語で、かつ複文化の狭間に生きる作家の視点から書かれた作品を教材に用い、学習者が様々な経験や視点を共有できる場を与え、「第三の場所」発見への足がかりとなる授業を目指した。日本語文学／越境文学と呼ばれるジャンルの作品が、日本語学習の動機付け、「日本語で書く」ことへの挑戦、そして「言語とアイデンティティ」に関して考えるというねらいにいかに有用であったかを、期末プロジェクトの作品分析とコース後のアンケートをもとに考察を行う。更に、日本語母語話者による「正しい」日本語の作品を読んで日本語／日本文化を学ぶという固定観念を越えた日本語教育に、本ジャンルの作品がいかに貢献できるかを示唆する。

SESSION 1-B: PEDAGOGY PAPERS [MEETING ROOM 404]

Chair: **Atsushi Fukada**, Purdue University

「初級レベルにおけるオンラインロールプレイの実践ー流暢さと談話レベルでの言語運用能力の育成を目指して」(Implementation of online role-play at the beginning level: Aiming to foster fluency and discourse-level interactive competence)

Chie Muramatsu, **Shinji Shimoura**, and **Atsushi Fukada**, Purdue University

入門期を越えれば、文レベルでの発話産出能力の育成に留まらず、学習した語彙、文法、文化知識を総合的に駆使する談話レベルでの言語運用能力の育成が重要な課題になる。談話レベルでの言語運用能力には、前述の発話産出能力に加え、リアルタイムでのコミュニケーションに対応できる発話の即時性及び流暢さが求められる。しかし、実際の教室活動では、時間数、一クラスに在籍する学習者数など、様々な制限要素があり、教師一人が学習者全員に十分な指導を行うことは困

難である。したがって、教室の外で学習者一人一人に、言語運用能力の育成を目的とする学習機会を提供することが必要となる。

このような現状に鑑み、当プログラムでは、オンラインで学習者一人一人に口頭練習の機会を提供できるSpeaking Everywhere(SE)を利用し、継続的オーラルアセスメントの一環として、談話レベルでの言語運用能力及びリアルタイムでの発話の即時性と流暢さの育成を行うことを目的とした総括的オンラインロールプレイタスクを開発、実践した。SEを使ったオンライン練習については、⑴練習が個人化できる、⑵心理的にリラックスした環境で練習が行える、⑶継続的に練習の場を提供できる、など様々な利点が挙げられている。

本発表では、リアルタイムの談話をシミュレートするロールプレイタスクの例を、デモンストレーションをまじえて紹介し、学生がこのタスクをどう捉え、またどう評価したか、アンケート調査の結果を基に報告し、さらに、今後、初級レベルにおける、談話レベルでの言語運用能力の育成にどのような課題、そして可能性が残されたのかを考察する。

「CBI 授業における学習者主体の評価活動」（Integrating student-centered assessment activities in the CBI classroom)

Kimiko Suzuki, Haverford College, and **Atsushi Hasegawa**, New York University

内容重視の言語教育（CBI: Content Based Instruction）の実践はここ十数年の間に日本語教育においても多くなされており、これらの報告では、どのような内容を扱うか、どのように言語と内容のバランスを取るかという点に主に焦点が置かれてきた（佐藤ほか，2013）。CBIを実践する上での更なる課題の一つは、言語／内容の両面における評価の問題である（Short, 1993）。しかし、現在までに評価活動の実践報告は十分になされていないのが実情である。この背景には、１）中上級コースになるにつれ、学習者間の日本語能力の差が大きくなる上、CBI授業では内容への志向が強くなることにより、言語能力の向上に対する実感が薄くなる傾向があること、２）言語だけでなく内容にも比重が置かれているため、評価の基準が多様化／複雑化すること、３）内容学習における評価の必要性自体が議論になっていないこと、などが挙げられる。担当教師が学習者の「伸び」を把握するのはもちろんのこと、学習者自身が言語／内容の両面において学習成果を認識することもCBIの教育的意義を確認する上では重要であろう。そこで、本発表では、東海岸の二大学で取り組んだ中上級CBI授業の評価活動の報告を行う。言語と内容の両面において、学習者が主体的に評価活動に参加できるように個人面談や自己評価法を取り入れた。また、内容学習の評価の一部として、学習者に内省を促すエッセイ活動を行った。発表では、活動の詳細と学習者から得たデータを報告し、学習者主体の評価の意義や可能性、CBI授業における評価活動の重要性を検証した上で、そこから見えてきた課題も考察する。

「学習者間の自由会話を通しての会話技術向上の試み」(Towards the cultivation of conversational skills: An analysis of free conversation between learners of Japanese as a foreign language)

Kiyomi Kawakami, University of Iowa

会話の遂行は言語使用の中核をなすものであり、特に自由会話は目標言語が使用されるコミュニティーに参加するためのツールでもある。しかし、中・上級の日本語学習者でも、自由会話の展開に必要な技術が十分に使用できていない事例が観察される。このような問題はこれまで主に母語話者と学習者の会話や、タスク遂行を目指した授業中の会話を調査資料として議論されてきた(Ohta 1999、Mori 2002等)が、教室外での学習者間の自由会話を分析したものは少ない。そこで本研究では、学習者の自由会話を調査資料とし、授業で行った会話展開の練習を含む活動が、教室外でどの程度活用できているかを分析する。

中・上級の日本語学習者同士が自由会話をする「日本語サロン」での2者間の会話（16ペア、計8時間）を会話分析の手法を用いて分析した結果、一方の話者が短い応答を繰り返す会話の連鎖や、話題が立ち上がった直後に立ち消えになる連鎖など、「追加質問をする」「感想を述べる」「スムーズに話題を転換する」といった会話を展開していくための技術が十分使用されていない事例が、上級の学習者の中にも観察された。また、会話参加者に録音した本人たちの会話データを聞かせることにより、学習者自身に会話展開の問題点に気づかせる作業(Wong & Waring 2010)を行い、会話を展開するための技術について話し合った。さらに本研究では、「気づき」の作業の前と後の会話を質的に比較分析することにより、日本語母語話者との接触が多く望めない状況でも、学習者が学習者同士の会話から会話展開の技術を身につけることができるかどうか議論する。

「日本語上級クラスに於けるインタビュー調査の実施とその形成的評価」(Interview projects integrated in an advanced-level Japanese course with formative assessment)

Ayako Nagai, University of California, Irvine

本稿では、アメリカ四年制大学の日本語上級クラスに於けるインタビュー調査の実施とその形成的評価について論じる。現在アメリカの外国語教育では、ナショナルスタンダーズの達成を目標としたカリキュラムが定着し、学生達が２１世紀スキルを培うための言語活動も広く浸透してきた。それに伴い、伝統的な総括的評価に代わる代替的評価の必然性も出てきた。総括的評価では、学期末に筆記試験により日本語についての知識が問われ、点数化されるのが典型的であり、学生ができない部分に焦点が置かれがちである。しかし、ナショナルスタンダーズでは、学生は何ができるかという達成度が重視されており、学生が身に付けた運用能力が評価されるべきである。近年、代替的評価として導入され始めた形成的評価は、学習のための評価として注目を浴びている。形成的評価では学習の過程で教師が学生に頻繁にフィードバックを与え、そのフィードバックを基に目標を修正したり、学習方法を変更したりする。

本研究のプロジェクトは、学生自身が関心のある社会問題について調査した後、日本人にインタビューを実施し、学期末にクラスで調査報告を行うというものである。論題の例としては、ゆとり教育の是非、原子力発電所の廃止、尖閣諸

島への自衛隊派遣等が含まれた。評価には、形成的評価を適用し、プロジェクトの一つ一つの過程で教師がフィードバックを行った。本研究では、学生へのアンケート結果も分析する。学習者は形成的評価を通して、日本語力をより効率的に伸ばすことができたと認識したかといった疑問を追及する。最後に、今後この形成的評価を日本語学習により効果的に適用するための改善策も考えてみたい。

SESSION 1-C: SECOND LANGUAGE ACQUISITION (SLA) PAPERS [MEETING ROOM 407]

Chair: **Keiko Kuriyama**, Indiana University

"Does reading aloud improve foreign language learners' speaking ability?"

Sueyon Seo, University of Wisconsin, Milwaukee

The purpose of this study is to find ways to enhance foreign language students' speaking ability. Many such students are anxious about speaking the target language because they are conscious of their imperfect pronunciation and feel strange about their own voice pronouncing the unfamiliar sound. I explore whether the practice of reading aloud in the classroom addresses this problem. 31 second-year students of the Japanese program at the University of Wisconsin-Milwaukee have been divided into a treatment group and a control group. Each member of the treatment group reads out a 1-minute-long passage. Five minutes are devoted to reading aloud five days a week. Students are told not to focus on detailed comprehension: the point is to make them get used to their own voice while reading a target language text. Translations of the passage are given to the students in advance and kanji symbols are transcribed into hiragana. The study lasts 8 weeks. In order to gauge students' progress, a pretest and a posttest of speaking is administered to both groups. The tests are assessed based on three features: length of the sentences, fluidity of speech, and pronunciation accuracy.

The rationale of the study is based on two presumed benefits of reading aloud. First, it should make students get used to their own voice pronouncing the target language and thus reduce anxiety. Second, students' articulatory mechanism will be trained by pronouncing the unfamiliar sounds of the foreign language. Although reading aloud may not be useful in native-language classrooms because it may hamper comprehension, it may have positive effects in foreign language classrooms. The study is being carried out in the Fall semester of 2013, and the results will be available by the end of January 2014.

「日本語初級学習者を対象とした、オンライン口頭練習による日本語ピッチアクセントの習得効果とその練習方法」(Effects of oral practice on Japanese pitch accentuation through an online program)

Mayu Miyamoto, Purdue University

日本語において、ピッチアクセントは単語の意味を左右する極めて重要な役割を担っている。しかし、実際の教育現場では時間的制限などの理由から軽視されがちである。ピッチに関する適切な指導がないまま身についたピッチは、後に矯正するのは困難になる。そこで、オンラインプログラムを使用した口頭練習を宿題として授業時間外で行う事で、時間的制限にとらわれずに学習者が日本語ピッチアクセントを練習する機会をもうけ、その効果的な練習方法を考察する事を目的に、本研究を行った。

本研究は日本語初級学習者２２０人を対象とし、課のはじめにオンライン上で新出単語を口頭練習する宿題に、４種類のピッチアクセントの練習を追加し、その効果を分析した。オンラインの宿題は、日本語の母語話者が話すビデオと画面に表示される指示を見ながら学習者が口頭練習を録音して提出するという形式で行った。単語は、その課で重要単語になっている３０語を使用した。４種類の練習方法は、1)ひらがな＋アクセント記号＋音声、2)ひらがな＋音声、3)音声のみ、4)ピッチ練習なし、とした。学習者は４つのグループに分けられ、それぞれ与えられた４種類の練習のうちの１つを行い、宿題としてオンライン上で提出した。その後、間隔をあけ２度同じ単語を使用してアクセントの定着度を測った。

実験後、学習者がピッチアクセントの練習について効果があると思うかどうかを問うアンケートを実施し、分析した練習の効果と学習者のアンケートの結果を比較した。本発表では実験の結果報告を行い、今後の日本語ピッチアクセント指導の可能性について考察する。

「日本語クラスにおける未習初級者と既習初級者の第二言語不安、成績、学習継続状況の比較調査」"Comparing the anxiety, performance, and retention of beginner and advanced beginner Japanese language students"

Keiko Kuriyama, Indiana University

学習者要因の一つである第二言語不安の先行研究においては、学習者が経験するとされる様々な不安要因や学習環境が考慮されてきたが、学習経歴の異なる未習初級者と既習初級者がお互いに及ぼす影響について調査した研究は少ない。ゼロから日本語を始める未習者と高校で日本語を学んできた既習者とが共に在籍する日本語一年生・前半のクラスは両学習者にとって理想的な学習環境であると言えるだろうか。そこで、本研究では、米国中西部にある州立大学の日本語一年生(J101)に在籍した学生513名を対象に、未習・既習者間の外国語不安測定、学期末の成績、学習継続状況の比較を3年間に及び実施して調査を行った。

その結果、外国語不安測定の分析からは　3年連続して有意差が認められ、未習学習者の不安値の方が高いという結果が得られた。しかしながら、成績、学習継続率に関しては、両者の間に特に有意差は認められず、スペイン語、及びフランス語の未習初級者と既習初級者を対象に第二言語不安を調査した Frantzen and Magnan (2005)の先行研究とは異なる結果となった。先行研究との違いとしては、同大学ではアドバンス初級コースが開講され、既習者数の割合が減少した年を含めた調査であったこと、又、学習者の約半数が漢字圏出身者であったことが挙げられる。本発表では、今回の調査結果報告をもとに、第二言語不安と理想的な学習環境、日本語クラスにおける未習・既習者ダイナミック、今後の課題と展望等について考察していく。

"Style choice by learners of Japanese"

Etsuko Inoguchi, Kanazawa Institute of Technology

This is a qualitative case study of three intermediate-advanced learners of Japanese with different learning backgrounds, focusing on how they use sentential endings with different speech styles--direct style and polite style. The previous studies by Makino (1983), Ikuta (1983), and Maynard (1991, 2001) found that native speakers determine which style to use predominantly based on the formality of the situation, relationship with the interlocutor, and stylistic reasons. The current study discusses style choice by JFL learners from the viewpoints of interlanguage pragmatics and classroom discourse; the former focuses on how the style choice reflects the learners' perception of politeness, and the latter is related to how the classroom setting provides input and gives learners opportunities to select a particular style in their output.

The study investigates three students studying Japanese in JFL environments. I collected data through 1) observations of classroom behaviors which were video-recorded and transcribed, 2) an informal, semi-structured interview to elicit the learners' production in Japanese, and 3) an interview to determine the learners' perception of style choice. All participants used the polite form dominantly when they talked to teachers and classmates, while one student used the direct style with his classmates. There were some deviations of style choices; one student often omitted predicative endings when he answered a question or was facing pressure to produce a series of sentences. This finding is in accordance with Marriott's (1995) study where she notes that high school JFL students omitted predicative elements often before their study abroad. In addition, the style choice is influenced greatly by learners' grammatical competence and sociopragmatic knowledge. Finally, the introspective interviews suggest that in order to understand the real communicative functions of direct and polite styles, learners need to internalize both styles within their interlanguage, and use both styles in authentic communicative interactions.

SESSION 1-D: SPECIAL INTEREST GROUP PANEL ON PROFICIENCY ASSESSMENT [MEETING ROOM 408/409]

Chair: **Ken'ichi Miura**, Franklin & Marshall College

Panel Title: **「Proficiency Guidelines と日本語教育」 (Proficiency Guidelines and Japanese Language Education)**

Proficiency Assessment SIG は、ACTFL Proficiency Guidelineを基にした教授法、評価等の研究、意見交換を旨としている。今回、４技能に渡るガイドライン（２０１２）が作成された事を踏まえ、ガイドラインを基にした、話す、書く、聴く、という三技能を中心にした研究発表をし、また、他の日本語教育者との討論を通して、より効果的な教授法、評価法を探りたい。

話す技能においては、発表１で、OPIの各レベルにおける語彙の重要性を示すことにより、学習者の話す能力の上達に不可欠な種類の語彙を明示し、教育の場での応用を提唱する。発表２では、書く能力の評価においての指針としてのガイドラインの使用を報告する。特に、ガイドラインに照らした学生へのフィードバックの効果に重点を置く。発表３は、話す能力のガイドライン、書く能力のガイドラインを基にした評価、指導によって、どのように効果的に中級から上級への移行を目指したかを報告する。発表４は、日本語教育において、見過ごされがちだった聴き取りに焦点を当てる。聴き取る、という能力をガイドラインに沿って見直し、既習の文法、語彙にとらわれないオーセンティックな聴き取り練習を紹介する。

「日本語学習者会話データベースにおける OPI コーパスのレベル別語彙分析」(Corpus analysis of vocabulary by OPI proficiency levels: Interviews from a database of Japanese learners' conversation)

Mamoru Hatakeyama, Carnegie Mellon University

「OPIインタビューの各プロフィシェンシーレベルの機能を安定して果たし、判定を受けるために、被験者はそれぞれのレベルに応じた語彙を使用し、またインタビュアーの使用する語彙を理解しなければならない。OPIインタビューに現れる語彙はレベルの違いにより、どう異なるのかを探るため、日本語学習者会話データベース（国立国語研究所、2010）のデータを分析した。同データベースに収録されている339件のOPIインタビューのテキストデータをKHCoder（樋口、2010）により解析したところ、総抽出語数は255万語、異なり語数は1万6千語であった。このうち、今回は動詞に着目し、異なり語数を比較したところ、初級においては4級レベルの動詞が最も多く（34.3%＝73/213）、続いて3級（31.9%）、2級（18.8%）、級外（13.1%）、1級（1.9%）となっていた。これに対して、中級以降では、いずれも、2級レベルの語彙が最も多かった（中級33.8%＝252/745；上級35.4%＝327/925；超級33.8%＝131/388）。先行研究において、OPIと日本語能力試験の得点には相関があり、2級語彙の中心である漢語・抽象語彙の重要性（横山、2000）の指摘が再確認された。異なり語数では、超級と上級は大きな違いが見られなかったが、のべ動詞語数に対する語彙的複合動詞の割合を見ると、超級が3.0%（＝67/2243）、上級が1.8%（＝468/26057）、中級が1.4%（＝479/34321）、初級が0.9%（＝37/4203）となった。意味が不透明なことが多く、習得の困難な語彙的複合動詞（陳2010）の特性が反映されており、レベルを示す一つの指標としての可能性が示唆された。

「作文評価を考える—作文評価の信頼性、実用性、影響力を高める試み—」(Writing assessment: Ideas for improving reliability, practicality, and impact)

Mari Stever, Yale University

学生の作文を添削するだけであれば、教師が最善だと思う方法を使っても問題はないだろう。しかし、作文をテストに出した場合、採点をしなくてはならず、その際、採点方法の信頼性と実用性が問われることになる。従来の採点方法では、採点者間で違いが出る場合が多々あった。これを改善すべく、評価の際にルーブリックを取り入れてみた。まだ初期段階

なので、はっきりとした結果が出ているわけではない。また、この評価方法は期末試験で試みたので、学生への影響力（つまり学生が評価を受けた後の作文能力が上がったかどうか）は知ることができない。このような点を改善するため、学期中の作文についてもルーブリックを取り入れフィードバックの一部にし、学生の作文能力に対する影響力について考えたいと思っている。

これまで、評価基準について特に何かを基準としたわけではなかったが、学生に何を期待しているかを明確にする上で、ACTFLの Writing Proficiency Guidelinesを参考に再考し、評価基準そのものも見直し、改善する。本発表において、以上のような作文評価の方法、過程、結果について報告したいと考えている。

「ACTFL Proficiency Guidelines 2012の能力指標に基づいたプロジェクト案とそのコミュニケーション能力評価の一実践例」(A project for intermediate-level learners of Japanese using the ACTFL Proficiency Guidelines 2012)

Momoyo Kubo Lowdermilk, Stanford University

これまで、評価基準について特に何かを基準としたわけではなかったが、学生に何を期待しているかを明確にする上で、ACTFLの Writing Proficiency Guidelines を参考に再考し、評価基準そのものも見直し、改善する。本発表において、以上のような作文評価の方法、過程、結果について報告したいと考えている。

本発表では、日本語学習履修時間数が250時間前後の、中級–中レベル（Intermediate-Mid）の学習者が中心のクラスで行っている学期末プロジェクトを紹介する。学習者の目標を明確に示すために、ACTFLプロフィシェンシー・ガイドラインを学習目標の設定に活用する。また、学習者の日本語熟達度を客観的に把握するために、学習成果の評価の一部として同ガイドラインを用いる。紹介するプロジェクトは、口頭発表とレポート提出の両面を対象としており、「テキストの型」の「文」（中級）から「段落」（上級）への進歩の過程、および最終的にできあがったプロダクトに焦点をあてる。

「リスニング再考」(Reconsidering listening activities based on the ACTFL Proficiency Guidelines)

Kumi Omoto, Franklin & Marshall College

我々語学教師は学習者のリスニング能力の向上の為に、どのような聴解練習を授業内、あるいは授業外で工夫し、取り入れているだろうか。限られた授業時間内では、文法や会話練習に重きがおかれ、聴解練習は主に宿題で補い、後は試験の中でチェックする、というのが一般的な傾向ではないかと思われる。この点に関して、梅村（2003）は、日本語教育の教室には聴解能力の評価の方法だけがあって、聴解の指導がほとんどなされていない、と指摘している。

リスニング教材そのものにもいくつかの問題点が見られる。特に教科書やワークブックのリスニングは、一定のスピートで非常に明確に話されており、各課の語彙や文型をおさらいするかのようにコントロールされている。しかし、実生活ではこのように完璧に語彙やスピードがコントロールされた日本語を聞くことは、まずない。言いよどみ、重複、相槌があり、話すスピードも変われば、周りの雑音も入ってくるというような中で、我々は聞くという作業をしているのである。岡崎（2008）は、リスニング教材の話し手は多くの場合日本語の母語話者が原稿を読んでいるような話し方をしており、話し言葉の特徴を備えている物が少ないとしている。

２０１２年、ACTFLは初版以来初めてリスニングのガイドラインを改訂した。本発表では、このガイドラインに沿って、次のレベルへと進む為に学習者が必要なリスニング能力、聴解教材と指導上の問題点を検討した上で、現在発表者の大学の日本語プログラムで試しているリスニングアクティビティーを紹介し、聴解練習を今後どのように授業に取り入れていけるか、その可能性について参加者と共に考えてみたい。

SESSION 1-E: LINGUISTICS AND PEDAGOGY PAPERS [MEETING ROOM 411]

Chair: **Naomi McGloin**, University of Wisconsin, Madison

「自然会話における終助詞「よね」の機能に関する一考察」(An analysis of the functions of the sentence-final particle *yone* in natural conversation)

Naomi McGloin and **Jun Xu**, University of Wisconsin, Madison

多くの先行研究では終助詞「よね」は確認・同意を求める機能、同意・共感を示す機能を持っていると指摘されている（伊豆原2003、蓮沼1995等）。しかし、この説明では、「よね」と「ね」の違いが明瞭ではない。本研究では、「ね」が「話し手と聞き手が初めから同一意見であると見込まれる場合に使用される」（森山1989）のに対して、「よね」はなんらかの認識の「ずれ」を意識した表現であると提唱する。例えば、「いらしゃいますよね」と言った場合は話者は聞き手との間に認識の「ズレ」がある可能性を想定している。また、「夕べ、メガネ、ここにおいたよね」という発話は、話し手の発話時の認識と以前から持っていた認識の「ずれ」を表すと考えられる。一方、インタラクションで生じる「ずれ」もある。下記の例では、話者Aと話者Bの間に認識の「ずれ」が存在しており、それをふまえて、三行目で話者AはCに向かって「よね」を使用し、Cにサポートを求めている。

１．　A: 暖かいですね。
２．　B: えっ、そうですか。私は寒くて寒くて。
３．　A: （Cに）暖かいですよね。

本研究では、上記のような自然会話で使用されている、「確認要求表現」といわれている「よね」を考察し、「よね」の使用には、認識面では「ずれ」という概念、そしてインタラクション面では「サポートを求める／与える、相手を引き込む」という機能が大きく関わっていることを検証する。また、「ずれ」には、話者自身の認識の「ずれ」、会話参

加者との認識の「ずれ」、一般社会通念との「ずれ」、期待される応答が出てこない際に生じた話し手と聞き手との認識の「ずれ」、の四種類があると確認された。

「現代語話者のコト・モノ・ノの使い分け」(The structure of formal nouns *koto/mono/no* in contemporary Japanese)

Hidemi Riggs, University of California, Irvine

VPに付くノはVPをNPに変換する語で、日本語版gerundとして紹介されるのが一般的だが、この方法は学習者の理解促進に余り効果がないようだ。実際、中級レベルの作文では未だこの構文が現れにくい上、ノの誤用も目立つ。本稿ではより良い文法説明を求め、母語者のノ・コト・モノの使い分けを探索している。書籍、日本語テレビ放送から計約九千件の使用例を採集したデータを分析、日本語のnominalizerは従来日本語文法で説かれる通り形式代名詞である、という結論に達した。

分析方法は強調語随伴、音声と字幕表記との差、音韻的強調の有無、フォントの大小や色彩、音声と英語字幕翻訳との関連性を中心に精査した。コトには「こそ・だけ」や音声的強調(ストレス)を伴う例、字幕でVPが彩色字で表示されている例が多く、逆にノでは上接するVPの後のVPが赤字で大書されている例が複数見つかり、二語の対照的な使われ方が顕著になった。三語の分布は使用頻度においてノが圧倒的に他の二語を凌駕している事、ノが表す抽象名詞（例:訳(わけ)）の種類が三語中最大でコトやモノを代替えしている例も多数ある事が判明した。これらに拠りコトvs.モノには概念における動静の差がある一方、コト・モノvs.ノはVPに置く焦点の高低に差が見られると考察、それに基づく文法モデルを提唱している。VP前方・後方の焦点組み合わせという視点で「VP1ノはVP2コト」という実例文を文の焦点がVP2命題に重なっている事を証明している。又、モノノに逆接の意味が派生したり、ノダに説明の意が付随したりする事もノ後方焦点代名詞という解釈で説明している。

「「結果」の文法化　―名詞から接続詞へ―」 (Grammaticalization of "*kekka*": From noun to conjunction)

Kazuko Tojo, J.F. Oberlin University

近年、(1)の下線部のような「結果」の接続詞的用法を目にする。(2)のように指示語を前接した合成接続詞も多く見られる。また、(3)の用例のように「結果」の主題化に続く事象叙述では、「結果は」が述部の枠組みを表すものが多く見られる。この用法では「結果は、」を「結果、」に書き換えても不自然ではない。

(1)　お地蔵さまから、どうにも離れがたく、結果、取材時間のほとんどを本堂で過ごすことになります。（朝日新聞 digital）

(2)　工場から直接、消費者へ届けるオンラインショップを立ち上げ、企画・生産・販売を一括して行うシステムを作りあげた。その結果、いまではフェイスタオルだけでも月に 1 万枚以上を売り上げる。（朝日新聞 digital）

(3)　運動療法は前述の計算式にのっとって最適心拍数をはじき出し、徹底してそれに従うように指示しました。結果は約二カ月で二〇・四キロの減量に成功しました。（脳内革命）「結果」の接続詞的用法に関する先行研究で通時的に調査しているものは見受けられない。そこで、現代語の資料として『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下『現代日本語』）、現代から約100年の開きがある資料として『太陽コーパス』（以下『太陽』）を用いて調査を行い、考察を加えた。

「その結果は」で枠組みを示す用法は相対的に『太陽』に多く、より文法化が進んだ「結果、」は『現代日本語』に多く出現している。また、「その結果、」は両者目立って多いが、『現代日本語』のほうが多く見られる。枠組みを示す「その結果は」がそのまま接続詞的用法に交替していったという単純な変質ではないが、「その結果は」から「結果、」へ文法化という変遷があったと考えられる。

「デス･ダはどう教えるべきか」 (How should we teach *da/desu*?)

Michio Tsutsui, University of Washington

日本語教育において、デス・ダは従来、コピュラとして教えられて来た。これに対し、Tsutsui (2006)は、文末詞付き構文、名詞修飾節、文末接続詞節などにおいてダが脱落したり他の語に置き換わる現象を根拠に、デス・ダはコピュラではなく、時制と丁寧度を示すマーカーであると主張する。

日本語教育にこのマーカー説を採用した場合、次のような利点がある。

•イ／ナ形容詞の丁寧形は共にデスが付くが、非丁寧形ではナ型にのみダが付く。マーカー説はこの現象を説明できる。

•従来、ナ形容詞の語幹に続くデス・ダ等はその変化語尾として扱われ、名詞に続くデス・ダとは別物として扱われてきた。マーカー説ならこれらを同一物として扱える。

•文末詞の前でダが落ちる（例：先生øらしい）、関係節ではノに変わる（例：専攻が数学の学生）などは、従来、個別ルールで教えてきたが、マーカー説はこれらを一般ルールで説明できる。

一方、マーカー説も、説明的優位性が高いとは言え、問題がないわけではない。例えば、「AはBです」がA is Bに対応すると説明しながらデスがコピュラではないとすると、isの意味はどこから来るのかの説明が必要だが、これに強い根拠を持つ説明がない。

本稿では、マーカー説の利点・問題を考察し、結論として、デス・ダは時制・丁寧度マーカーとして教えるべきであることを論じる。また、この場合、関連文法の説明が具体的にどう変わるかも示す。

SESSION 1-F: PEDAGOGY PANEL [GRAND BALLROOM C]

Chair: **Shinji Sato**, Princeton University

Panel Title: **「日本語教育における言語イデオロギー：理論と実践」(Language Ideologies in Japanese Language Education: Theories and Practice)**

言語とイデオロギー、また、言語教育とイデオロギーの関係は長い間、言語人類学、批判的社会言語学などの分野では議論されているが、その知見は日本語教育には活かされているとは言い難い。本パネルでは言語イデオロギーを、「知覚された構造や使用を合理化したり正当化したりするものとして使用者が表現する、言語に関する一連の信念(Silverstein 1979:193)」と定義する。そして、日本語教育において言語イデオロギーがどのように表れているか、また、日本語の授業で言語イデオロギーをどう取り扱っていったらよいかをパネルを通して考えていきたい。

本パネルでは、まず、言語イデオロギーの理論を、日本語におけるさまざまな実例（例えば、日本語母語話者、標準語という概念）を紹介しながらわかりやすく概観する。そして、現在の日本語教育にかけているのは、日本語教育も日本語や日本文化に関するビリーフの維持、再生産に大きく関わっていることを再認識することであることを指摘する。その後、言語イデオロギーがどのように作用しているのかを、敬語という実例を用いて示す。最後に、実際に言語イデオロギーについて学習者と考えていけるような授業がどのように可能なのか、その実践例を２つ報告する。それは、１）初級日本語教科書の会話のイデオロギーを考える実践、２）「日本＝日本語＝日本人」、つまり、日本に住む人はみな日本語を話す日本人であるという図式を再考する上級の実践である。本パネルでは、規範的な傾向が強く、支配的イデオロギーの作用が大きく見られる日本語教育において、言語イデオロギーについて学習者と考察することがなぜ重要なのか、４つの発表を通して会場のみなさんと一緒に考えたい。

"Language ideology and its manifestations: Exploring implications for Japanese language teaching"

Mahua Bhattacharya, Elizabethtown College

Language teaching is often seen as an ideologically neutral activity. Linguists have traditionally believed that what people say about language use or structure does not represent 'real' linguistic data (Schieffelin, et al, 1998:11). However, it is precisely this dismissal that modern linguistic anthropologists hope to dispel. This paper is going to lay bare the workings of language ideology and how it impacts language teaching in general and Japanese language pedagogy in particular.

The research of Michael Silverstein and others has persuasively shown how the very variety of language people use for living their lives is permeated by 'sets of beliefs by users as rationalization of language structure and use,' which Silverstein defines as 'ideology.' (Silverstein, 1979:193). This ideological rationalization affects linguistic structure. This means that we change the way we speak a language once we understand how we are supposed to speak it. This rationalization process is actively promoted and carried out by communities, institutions, and political organizations that are historically situated in specific locations. Similarly, the ideas behind language 'development' identifying what a 'standard' language should also involve inclusion of certain components that are ideologically motivated by a certain group's ideas of 'identity, aesthetics, morality and epistemology,' and processes of exclusion that 'erase' deviations from the 'norm' (Schieffelin, et al, 1998:3).

This is why the research of scholars mentioned above represents an exciting array of ideas that can revolutionize the way practitioners of language teaching approach their discipline. Ideas about 'native speaker' understanding, selection of language materials, inclusion and exclusion of syntactical, lexical and pragmatic forms in teaching manuals, etc., are all affected by these perspectives, some of which this paper will hope to enumerate.

"What is "tadashii keigo"?: Native speaker sociopragmatic norms"

Shigeko Okamoto, University of California, Santa Cruz

Examining Japanese honorifics as a case in point, this paper reconsiders the notion of native speaker sociopragmatic norm, a particularly challenging notion as it often concerns the highly ideological issue of what constitutes socially 'appropriate' language use. There is a strong belief among native speakers as well as language teachers that one should learn the (normative) rules of honorifics in order to be able to use honorifics correctly. Recent research on honorifics has shown, however, that actual uses of honorifics are diverse and do not necessarily conform to the norms (e.g. Cook 2006; Okamoto 2011). But the "content" of the norms itself is often taken for granted. In this paper, I first examine the "dominant" norms of honorifics by examining the "prescriptions" evidenced in three kinds of materials: the 2007 government guidelines for honorifics, school teachers' reports on teaching honorifics; and self-help books on honorifics. I then investigate native speakers' metapragmatic comments expressed in online blogs (41 threads of postings) regarding honorific use. My analysis shows wide diversity with regard to the categorization of specific honorific forms (e.g. whether the prefix o- is a sonkeigo, teineigo, or bikago), the amount of honorifics to be used (e.g. nijyū-keigo, kajō-keigo), and the "appropriateness of honorific use in specific situations (e.g. how to deal with vertical and/or horizontal relationships).

The findings show that while the prescriptive norms reflecting the dominant language ideology may emphasize certain uses as correct, in specific social situations many issues emerge and speakers do not always agree on how honorifics should be used, illustrating the variability and multiplicity of the meanings of indexical signs (Eckert 2008; Johnstone 2011). I discuss the pedagogical implications of the findings to teaching JFL and suggest a broader approach to NS sociopragmatic norms that is more sensitive to contextual and individual variation.

「ドラマアプローチで学ぶ言語イデオロギー：『げんき』の会話についてのディスカッションと言語政策者を演じての会話作りの実践」(Learning language ideologies through a drama approach: Discussions about conversations in *Genki* and role-playing of language play)

Noriko Sugimori, Kalamazoo College

本発表では、教育実践において言語イデオロギーをどのように取り扱っていったらよいかを考えるため、米国の大学で行った日本語と社会言語学という二つの異なるクラスの実践を報告する。

日本語教科書で使われている会話文にはイデオロギーが表れているが、通常の授業ではそのイデオロギーには注意が向けられていない。例えば初級教科書『げんき』は、女性は男性より丁寧に話さねばならないという規範、裕福な白人留学生vs貧しいアジア系留学生という人種ステレオタイプ等を暗黙の了解としている（熊谷　2008)。その了解を学生が気づいているか否か探ろうと、会話文の内容そのものに注目させるため、まず『げんき』全課の会話をドラマに見立ててシナリオとして音読させた。次に登場人物の言葉遣いの違いに潜む意味（メアリーがたけしより丁寧に話し続けるのはなぜか）や、教科書に人種ステレオタイプが見られるか否かを議論した。その結果、女性は男性より丁寧に話さねばならないという規範の理解には差がみられたが、人種ステレオタイプについては学生自身も当然視していたことがわかった。

社会言語学のクラスでは、明治以降の日本の言語政策（標準語形成）の中で、今日の規範に結びつく日本語のイデオロギーが作られた歴史的経緯を学んだ。次に、言語政策に関わった歴史上の人物（森有礼、上田万年他）が現在の日本の言語状況をどう考えるかを学生に想像させ、その人物を演じさせた。実在の人物を演じることで、時代背景などへの理解を深めることを目的として実践された。授業後のアンケートによれば、現在の日本語とそのイデオロギーがどう形成されたのかを深く理解するのに役立ったことが示された。

「日本＝日本語＝日本人」というイデオロギー脱構築への上級日本語コースでの試み」(Dismantling the conflation of language, ethnicity, and nation in the ideology of Japaneseness: A case from an advanced Japanese course)

Yuri Kumagai, Smith College

本発表では、日本語教育の現場にいまだ根強く保持されている『「日本」には「日本人」が話す「日本語」がある』という言語イデオロギーを再考するために行った米国東海岸にある私立大学日本語3年生のコースでの試みを報告する。

近年、第二言語習得理論・外国語教育の分野で、いわゆる「母語話者」を基準とした目標設定が批判され、その見直しが議論されている。しかし、実際の現場では、「日本では…」「日本語は…」「日本人は…」といった文言が多用され、画一的な規範を教授するという傾向が続いている。日本人論によって蔓延する「単一民族国家」「日本＝日本語＝日本人」というイデオロギーは、「日本」に存在する民族、文化、言語の多様性を覆い隠し主流派の世界観や価値観が唯一のものかのように扱う。

当該コースには、学習者６人が参加した。上記のイデオロギーを再考することを目的に、アイヌ民族、部落民、琉球（沖縄）作家、在日韓国人、越境文学者によって（あるいは、それらをテーマとして）創作された文学作品、随筆、まんが、映画を教材として用い、学期を通して「日本人とは誰なのか」「日本語は誰のものか」というテーマを学習者と共に問い続けた。

本発表では、学習者が課題として書いた感想文、学期末に行った個人インタビューをデータとし、学習者の日本・日本人・日本語に対するイメージや考え方がどう変化したか、さらに、学習者自身が日本語使用者としてどんなアイデンティティを構築したかを分析する。そして、日本社会において「マイノリティー」的な立場に置かれる人々が日本語で創作活動を行うこと、そのような作品を日本語教育の場に積極的に取り入れることの意義を考察する。

10:50 a.m.–12:30 p.m. — Session 2

SESSION 2-A: PEDAGOGY PANEL [MEETING ROOM 402/403]

Chair: **Noriko Fujioka-Ito**, University of Cincinnati

Panel Title: **「第二言語学習におけるフィードバックの役割と実践での重要性 」 (Roles and Pedagogical Importance of Feedback in L2 Learning)**

長期間、フィードバック研究が誤答分析・対照分析を経ながら実証的に語学教育の分野で扱われてきたように、どのようにフィードバックを与えるべきかを解明することは普遍的な課題である。本パネルでは、誤用訂正の研究の歴史を振り返り、様々な授業形態や使用教材を考慮しながら効果的なフィードバックに関する考察と提案を行う。

発表1では、誤用訂正の研究の変遷をたどり、フィードバックの意義と役割を考察しながら理論的背景を説明する。そして、テクノロジーを利用した教材やフィードバック機能を使用した場合など、多様な学習形態での効果的なフィードバックのあり方について具体例をあげる。

発表２では、日本語１年生を対象に、韻律の練習方法を選択・自己評価させながら自律学習能力を促進させ、個別指導などを通してフィードバックを適宜与えたコースで、学習者が韻律学習への意識化を進ませ、自律的練習方法に肯定的な態度を持つに至った過程を紹介する。

発表３では、Lang-8というコンピューターサイトを使用して複数のネイティブスピーカーに添削を受けながら協働的な形で言語学習の認識を深めた作文の学習活動について報告する。さらに、言語学習者のための相互添削が可能なオンラインツールを使用した際、教師が与えられるフィードバックに関する考察と書き指導において読み手や言語の多様性を意識させる重要性について述べる。

発表４では、オンラインコースにおいて、フィードバックは教師の存在を感じさせ、学習動機を高める手段になるという仮定をもとに、ビデオ、音声、書式の３種類のフィードバックと学習モチベーションについて比較した研究結果を報告する。

「第二言語学習におけるフィードバックの意義と役割」(Significance and roles of feedback in L2 learning)

Noriko Fujioka-Ito, University of Cincinnati

フィードバックは、長い間、学習過程に不可欠なものとして認識されてきている。誤りは、言語の習得内容や習得方法と、目標言語の規則の発見に関する情報が提供できるとCoderの論文(1967)で提議されているように、1970年代に誤答分析を行った研究の多くが、誤りの研究を通して第二言語習得について解明し、教授法を改善したいという動機から始まった(Ellis, 1994)。そして、第二言語の授業でのフィードバックは、教師と学習者、また学習者同士などの交流活動に関する重要な研究の一つに発展した。それらの研究から、他者の協力を得る形でのフィードバックを取り込んだ交流活動を通しながら目標言語を適切に使用することが成功につながるという結論も出されている(Chaudron, 1988)。

最近では、遠隔教育やコンピュータソフトを使用したフィードバックの役割も注目されている。そのような形態のコースでは、学習者が入力した答えの正確さを分析してフィードバックが供給できるソフトウェアの機能を使用したり、学習者が自分自身の正確さが判断できるように自律学習能力を発達させながら学習を成功に導くことが可能である。しかし、その場合でも、コンピューターを使用して各学習者が掲示した考えを協働的に発展させたり、教師から直接与えられるフィードバックを併用すると最大の学習効果が上がることが先行研究（Matsumura & Hann, 2004など）で示されている。

本発表では、長い歴史を持つフィードバックが言語学習へもたらしてきた意義と形態の異なる学習活動での相互交流としてのフィードバックのあり方について論じる。

「自律学習促進のための韻律練習とフィードバック」(Exercise and feedback for the facilitation of autonomous Japanese prosody learning)

Tomoko Shibata, Princeton University

自律学習の重要性(梅田2005)が指摘されているが、筆者はそれを発音練習にどう取り入れるか模索している。発音習得では韻律の重要性が指摘され(佐藤1995)、シャドーイングや自己モニターなどの指導法が紹介されている(小河原1998)。では、そのような指導でどのようなフィードバックをすれば学習者に役立ち、自律学習が促進できるだろうか。今回、筆者の試みを紹介したい。

対象は日本語1年生で、学生は自分で韻律学習の目標を立て、練習方法や教材もその目標に合わせて選ぶ。宿題としてシャドーイングや会話、歌など自由に選んだ物の録音を提出したり、韻律聞き取り練習をする。また、ブログへのビデオ掲載やスピーチ発表の前などにそれを録音し提出する。

フィードバックは様々な形式で行う。普段の授業での不自然な発音矯正の他、録音に対しては学習者の自己評価にコメントすることで自己モニター力の育成を図る。韻律聞き取り練習では、リズム、アクセント、イントネーションの聞き取りをするが、発音や聞き取りに問題がある学生には個別指導を行う。オフィスアワーを自由に話す場として積極的に利用し、発音の間違いがあれば、話した後にまとめてフィードバックを与える。また、毎回のテスト後(学期中3回)、学生全員と発音に関する個別懇談を持ち、総合的なフィードバックを与え、目標の達成度や困難点などについて相談にのる。

先学期末のアンケート調査で、学生の韻律学習への意識化が進み、自律的練習法に肯定的であること、フィードバックについては、個別指導、録音へのコメントが効果的だと感じていることが明らかになった。今年もこの練習法を続け、更なる改良を目指す。

「“ Lang- 8” を使った書き指導におけるフィードバック」(Feedback on writing tasks using “Lang-8”)

Rie Tameyori, Princeton University

日本語教育における作文指導では、添削は教師が行うことが多く、そのような状況では、学習者が教師以外の読み手を想定するのは難しい（加藤, 2013）。また一人の教師が添削を行うと、学生はそれが模範解答だという印象を受けてしまいがちである。さらに日本語教育における作文指導では言語要素の正確さに焦点が置かれることが多く、思考内容を表現する技能の指導はあまり行われていない（小宮, 1992）という指摘もある。

そのような背景を基に、筆者は2011年秋学期から初・中級の日本語の授業で、Lang-8（言語学習者のための相互添削型SNS）を使ったプロジェクトを行っている。プロジェクトの流れは、学習者が自分の書いた作文をLang-8に投稿し、そこで母語話者から受けた添削やコメントを基に、再度作文を書き直すというものである。このサイトでは投稿が実際の読者に読まれるため、読み手を想定するという意味で、学習者の書き行為がより現実的となる。また複数の母語話者から多様な添削を受けることで、学習者は言語の幅広さも再認識できる。プロジェクト後のアンケートを見ると、学習者はサイト上での母語話者との交流に非常に高いモチベーションを示しており、このプロジェクトを通して、日本語で文を書く際に、正確さだけでなく自分らしい表現方法を意識するようになったとの声もあった。

本発表では、プロジェクトの活動内容と結果報告に加え、このようなオンラインツールに教師はどのようなフィードバックを与えられるかについて考察し、書き指導において、読み手や日本語の多様性を学生に意識させることの重要性について述べる。

「オンラインコースでのフィードバックのツールとモチベーション」(Tools of feedback and students' motivation in online courses)

Emi Ochiai Ahn, Mesa Community College

フィードバックは、学習の中心だと考えられているが、オンラインのコースで、効果的で効率のよいフィードバックを提供するのは、より努力を要するものであり、大変複雑なことである（Bonnel & Boehm, 2011）。Bonnel & Boehm（2011）は、オンラインコースで、フィードバックを学生に与える際に、どのような点に注意すべきかをまとめている。その結果の一つとして、可能なツールの中の一番いいものを使うべきであることを挙げている。

オンラインコースでの教師の存在感は、学習モチベーションにつながる。つまり、フィードバックが学習者に、教師の存在をより明確に伝えられる方法でなされていれば、モチベーションがあがると仮定できる。

この研究では、近年のテクノロジーの開発によって可能になった３種類（ビデオ、音声、書式）のフィードバックと学習モチベーションとの関係を比較した。研究は、３種類のフィードバックの中で、音声と教師の顔が見え、一番教師の存在感を感じさせるはずのビデオ、続いて、音声、そして、一番教師の存在感を感じさせないと予想される書式によって生まれるモチベーションを計る方法で行った。データ分析には、フィードバックが有効に使われているかを確かめる為にコースに取り入れられている反省レポートの内容と、この３つのフィードバックを経験した学習者の感想を聞くアンケート調査の回答を使用した。その結果、３種類のフィードバックの違いによって教師の存在感が変わるだろうという仮定との相違が生じたため、本発表では、オンラインコースでの効果的な学習方法とテクノロジーを使用したフィードバックへの影響について考察する。

SESSION 2-B: PEDAGOGY PAPERS [MEETING ROOM 404]

Chair: **Etsuko Takahashi**, Wesleyan University

「漢字の教え方とその背景」 (Teaching *kanji* and its underlying factors)

Etsuko Takahashi, Wesleyan University, and **Hisae Fujiwara**, Brandeis University

非漢字圏の日本語学習者にとって漢字の習得は最も困難を極めるものの一つであり、漢字の効果的なインストラクションについて日頃頭を悩ませている日本語教師も多い。筆者らはAATJによるJOINT (Japanese Online Instruction Network for Teachers)オンライン教師養成講座の一つである読解ストラテジーのコースを2010年および2013年の二回に渡って受け持つ機会を持ったが、その際、受講者はやはり語彙と漢字のトピックに最も興味を示し、受講者が漢字の教え方について深く悩んでいることを実感した。同時に、漢字インストラクションについて情報交換の場を切実に求めているということも痛感した。

こうした背景から、筆者らは2010年には中等教育及び高等教育に携わる日本語教師を対象にオンラインでアンケート調査を行い、日本語教師が漢字学習のどんな側面を重視し、また困難と見ているか、また、それがどのような背景に基づいているのかを調べた。更に、2013年の読解ストラテジーのコースを通して、受講者の方の漢字への知識の興味、そして漢字の教え方についての認識がどのように変化したか、特に、漢字の部首や音符のプロセスの仕方、未習の漢字の扱い方、コンテクストの役割に焦点をあてて、コース終了後にアンケート調査を実施した。

本発表は、2011年のアンケート調査結果に基づいた現職日本語教師の持つ漢字インストラクションについての根本的な洞察と、具体的なインストラクションの方法と、2013年の調査結果から窺える傾向をまとめたものである。この報告が日本語教育に取り組まれる諸先生方の様々な環境の特殊性を超えて、漢字インストラクションの効果について再考する機会となることを期待する。

「日本語学習者の個人差への対応」(Responses to individual differences among learners of Japanese)

Wako Tawa and **Kozue Miyama**, Amherst College

本発表は、flipped classroomやblended learningなどの概念は日本語教授法に応用可能ではないかという考察を目的としたものである。指導法に関わらず、日本語学習者間の各スキルの学習度到達に個人差がでるという事実は、日本語教師であれば、だれもが経験していることであろう。学習者の間に個人差がでる理由は無数にあり、その全ての理由を明白にすることは不可能であろう。言うまでもなく、学習における個人差の現象は、日本語学習者間だけに見られる現象ではなく、分野に関わらず起こる現象である。テクノロジーが大きく進歩してきている現在、flipped classroomやblended learningなどの概念を用いた教授法が多くの分野で実行され、また、学習者の個人差への対応により、学習目標達成率を高めることが可能になったという結果が得られている。従って、日本語学習においても、学習者の間の個人差は存在することを前提とし、一クラスの全学習者の到達度の統一を目標とするよりも、この個人差にどのように対応できうるかということに焦点をおいた研究を進めることは意義のあることではないだろうか。しかし、日本語教授の分野において、個人差に対応するということは教師、および、学習者にとって、具体的にはどのようなことを意味するものなのだろうかということを考える必要があるだろう。学習度到達の個人差への対応はアマースト・カレッジの日本語の授業でも過去１０年ほど実行されているが、学習目的が多様化してきている現在、アマースト・カレッジの実践を元に日本語教授の分野において、flipped classroomやblendedなどの概念の応用の可能性を考察してみるのが本発表の主旨である。

「学習者の自己モニターで口頭発表はどう変わるか？」 (How can Japanese learners' self-monitoring improve oral presentation?)

Mika Yamaguchi, Emory University

アメリカの大学の上級日本語クラスでは、学習者のスピーキングレベルにかなりの個人差があることが多い。ひとつのクラスの中で、学習者が各自のレベルに応じてスピーキング力を向上させるために、どのような活動があるだろうか。その試みとして、３回の口頭発表をビデオに録画し、自分のビデオを見て、気づいたことおよびこれから改善することを書いて提出するという活動を行った。この活動の目的は、学習者が自分の話し方や発表態度を見て、よかった点とこれから改善すべき点に気づき、自己モニターできる能力を身につけることである。上級クラスを終了した学習者には、その後も生涯学習として日本語の勉強を続けてもらいたい。そのためには、学習者が自分自身を自己モニターする習慣を身につけることが重要だと考える。また、もう一つの目的は、異なるレベルの学習者が、それぞれのスピーキングの課題を立てることによって、口頭発表という同じ教室活動でも、個別化した学習を可能にすることができる。本発表では、学習者がビデオを見て気づいたことと教師が気づいたことに違いがあるのか、また、学習者の自己評価には、しばしば過大評価や過小評価が見られると言われるが、学習者は自分の口頭発表に客観的なモニタリングができるのかについて考察する。次に自己モニターで気づいた点が、次の発表でどのように生かされ、どのような変化が見られたかについて述べる。また、この活動を通じて発表によい変化が見られた学習者と、あまり変化が見られなかった学習者では何に違いがあったのか、今後自己モニター能力を養う活動としてどのような改善点があるかについて考えたい。

「初級学習者が日本語でのプロジェクトワークで抱える問題とその原因－学校紹介ビデオ作成プロジェクトの事例から―」 (Challenges that beginner-level learners of Japanese encounter during project work and their causes: A case study of a video creation project)

Kazuhiro Yonemoto, University of British Columbia, **Noriko Kimura**, Hiroshima University, **Nana Suzumura**, University of Hawai'i, Manoa, and **Ayaka Sogabe**, University of Michigan

北米の日本語教育では、協働学習やコミュニケーション促進などを目的に、プロジェクトワークが取り入れられ、その報告も盛んに行なわれるようになってきた（Kaku, 2011）。しかし、これまでの調査・研究では、プロジェクトワークの内容記述や実施後のアンケート、インタビュー、日記、成果物の分析にとどまり、活動中のやりとりの内容には言及されないことが多かった。そのため、学習者から「プロジェクトワーク遂行に問題があった」と報告されても、活動中にどのような問題が表出し、学習者がどのように解決したのか、もしくは諦めたのかについては明らかにされてこなかった。

そこで本研究では、学習者が日本語でプロジェクトワークを行うにあたって、どのような問題を抱えうるのかを調査した。調査協力者は北米のイマージョン環境の初級後半学習者16名（4グループ各4名）である。具体的には、「学校紹介のためのビデオ制作」プロジェクト遂行中の学習者間の会話（全18時間）内で、学習者がコミュニケーション上の問題に直面している場面を抽出し、その解決法と解決できない場合の原因について検討した。

分析の結果、学習者間のやりとりでは、意思決定を行う際に明確な表現を用いないために、重要事項の決定が共有されないことや、グループメンバーに質問をしても、言語形式や内容に関わらず無視されてしまい、険悪な雰囲気になってしまうことが観察された。このことから、プロジェクトワークを行う際には、１）通常授業と関連させ、問題解決方略を段階的に指導すること、２）プロジェクト遂行過程の重要性を強調し、問題解決への積極的な取り組みを促すことが必要だと考える。

SESSION 2-C: SIG PAPERS ON LANGUAGE AND CULTURE & PROFESSIONAL DEVELOPMENT [MEETING ROOM 407]

Chair: **Maki Hirotani**, Rose-Hulman Institute of Technology

"Collaborative learning: Building verbal and non-verbal competence through social media projects"

Maki Hirotani, Rose-Hulman Institute of Technology, and **Kiyomi Fujii**, Kanazawa Institute of Technology

With the development of Internet technology, many collaborative activities between native and non-native speakers have been widely conducted in foreign language classrooms. Previous studies have examined the effects of such collaborative activities between native and non-native speakers and reported positive effects on the development of language skills. In addition, researchers have pointed out the importance of developing learners' intercultural competence through such activities. According to Bennett (2008), Intercultural Knowledge and Competence is "a set of cognitive, affective, and behavioral skills and characteristics that support effective and appropriate interaction in a variety of cultural contexts," which can be classified into: two types of cultural knowledge (self-awareness and worldview frameworks), two types of skills (empathy and verbal/non-verbal communication), and two types of attitudes (curiosity and openness). Language studies, then, deal with verbal and non-verbal communication skills. Although it is suggested to assess both verbal and non-verbal communication skills, no study to date has investigated the development of both non-verbal and verbal communication skills through collaborative activities.

It is for this reason that the researchers examined both verbal and non-verbal communication through a collaborative project between JFL and EFL students. 12 learners of Japanese and 23 learners of English were involved in the project. The learners have worked on a series of video assignments on verbal and non-verbal communication-related topics, and interacted with each other in Japanese and English on private pages over Facebook for four month. We have assessed the development of their intercultural competence with reference to the rubric by Bennett (2008), using the Facebook data, a set of questionnaires conducted before and after the project, and self-reflection logs for each video assignment. In this paper, we will provide an overview of the project and report the salient results attained through the analysis of the data.

「選択科目としての「日本文化クラス」の可能性」(How can we make the best of a "Japanese Culture" class?)

Yoko Hanson, Coastal Carolina University

全米規模での教育予算削減のあおりを受け、外国語教育が縮小または削除される傾向はここ数年改善されていない。地域によっては注目度の高い日本語も、全体的な履修者の数は少ない。よって日本語やアジア研究のような専攻を持たない大学では、削除対象の教科にされることは避けられない状態だ。改善策の一つとして、Coastal Carolina Universityでは「文化」に焦点を合わせたクラスを試みている。日本語を語学として教える以前に「日本」に興味を持たせ、選択科目としての「日本文化クラス」履修者数を増やし、そこから「日本語クラス」へ後押しするのが長期的な狙いだ。

クラスは英語の講義形式で行われ、1学期目の履修者は18名だった。日本語はいくつかの名詞と挨拶程度のフレーズを紹介するだけにとどまり、本来なら語学クラスに組み込まれるべき一般的な日本文化だけを集結させた。そして対面式のクラス環境を有効に使うため、学生の発表、討論、かつHands-on-activityをふんだんに取り入れた。セールスポイントであったアクティビティの用意、ゲストスピーカーや学外からの協力者を得た経緯、テストや評価に関する難点などを紹介、考察する。また、日本語を専攻しない学生が「日本文化」のクラスを取った理由は何であったのか。日本語への興味を引き出すことができたか。選択科目としての位置を最大限に利用するには、何を強調するべきなのか。学生へのアンケート結果を元にしながら、新たな可能性を検討したい。

「日本語の同期型 e ラーニングコースでの動機付けに関する一考察　－チャットでメンターが果たす役割－」(A study on motivation in synchronous e-learning courses in Japanese: The role that mentors play in chat)

Michiyo Takasaki, Japan Foundation, Mexico

近年、地理的条件や教育の機会不均等を克服する手段として遠隔教育やeラーニングが隆盛である。一方、その動機の維持の困難さも指摘されている。動機維持のために、メンターと呼ばれる管理者が学生に応じたり、講義用PCに学生プロフィールを表示して、講師が内容にそれを盛り込めるシステムが開発されたりしている。いずれも学生が自分の存在を認知されたという満足からその動機を維持したとされている。

発表者らはインターネットライブ配信ソフトウエアを使用して、日本語eラーニングコースを提供している。学習者は、授業撮影場所である教室とライブ上の2カ所から参加している。本発表では、ライブ上の参加者がどのように動機を維持しコミュニケーションを活性化したかを、チャット上のやり取りから一部明らかにする。方法として、配信終了後のチャットを時系列に主体、対象、内容で整理した。次に、チャットと授業内容を照合した。

結果として、チャットは①技術的問題に対応し参加者の不満を解消する、②時差や画面上の制約から生じるコミュニケーション不全を円滑に媒介する、③教室外に伝わりにくい日本語の指示や流れを母語で説明して、教室との距離を縮める、④講師が行っていない呼びかけ、質問、ほめ、励ましでライブ参加者間の触媒となる、⑤独自に意見交換の場となる、と段階的に動機を維持し関与意識を高めていた。チャット担当者はメンターとしてライブ参加者独自の時空間の中で、教師に代わって文脈に応じた臨機応変な働きかけを行うほか、ライブ空間を教室につなぐ役割、母語による理解補完など言語学習に重要と思われる役割を果たしていた。

「ボトムアップで始まる、アーティキュレーション活動と教師成長の事例報告ー「みんなの Can-do サイト」をツールとして」(A bottom-up approach to articulation and the development of teachers: A case study using "Minna no Can-do Site")

Aiko Kitamura, College of William & Mary, and **Tomomi Sato**, University of Virginia

本発表は日本語教育グローバル・アーティキュレーション・プロジェクト（J-GAP）の活動を機に現場の教師が「みんなのCan-doサイト」を利用し、ゴール設定と授業活動、及び学習者の自己評価を行い、アーティキュレーションがカリキュラムの質の向上と教師の自己成長につながった事例報告である。

異なる機関の教師がバックワードデザインの考えから共同で初級クラスのコース目標、各課の目標を「Can-do」で設定した後、それを学習者と共有し、定期的に根拠と条件などを含めた自己・ピア評価をさせ、適切な自己評価能力の育成を期待した。この活動により、「Can-do」がパフォーマンスレベルでの学習目標の設定とそれに即した教室活動の実践につながり、さらには使用教科書が違ってもほぼ同じ「Can-do」設定ができ、その結果到達目標の共有と「Can-do」のプログラム内外における共通言語としての可能性が再確認できた。

この活動において特記したいのが、学習者と教師間の連携向上と教師の成長である。教師と学生が常に目標とその達成度を意識できたと同時に、自己評価が学習者から教師、教室活動へのフィードバックともなった。学習者と教師、教師と教師が「Can-do」をツールとしてゴールを共有し、「できる」をすり合わせることで、教室活動の改善と教師成長につながったと考えられる。また、学習者の適切な自己評価能力育成が円滑なトランジションへの手助けとなりうることに触れ、この活動がプログラム内外の円滑なアーティキュレーションにつながることを示唆しつつ、アーティキュレーション活動は現場でできるボトムアップ型教師育成となることを提唱したい。

SESSION 2-D: SIG PANEL ON LANGUAGE AND CULTURE [MEETING ROOM 408/409]

Chair: **Yoshiko Higurashi**, San Diego State University

Panel Title: **Issues of Internships in the U.S. and Japan: Evaluation**

This is the continuation of the Panel on the "Issues of Internships in the U.S. and Japan" presented at the AATJ Spring Conferences in Toronto in 2012 and San Diego in 2013. This is probably going to be the last Panel on this topic. The Panel focuses on evaluation this time.

The academic curriculum with increasingly demanding global emphasis requires or strongly recommends internships at sites where foreign languages are the main means of communication. These community service learning experiences provide our students with a tremendous opportunity to witness first-hand how the languages are used in social contexts and what role culture plays in daily business activities. However, there are issues that we language teaching professionals must be aware of.

The topics covered by the panelists will include, but will not be not limited to, (1) ways to monitor our students at the internship sites, (2) how to evaluate our students' performance, and (3) how to obtain constructive criticism from internship providers and how to incorporate them into advising sessions for students. The panel also examines other issues related to the internships and seeks possible solutions.

The Panel will report (1) innovative approaches to the challenges taken, (2) accomplishments and improvements realized, and (3) setbacks and frustrations experienced. There will be two presentations each on internships in the U.S. and Japan: from San Diego State University and the University of Memphis on internships in the U.S., and from the Reischauer Institute of Japan Studies at Harvard University and the Stanford Japan Center in Kyoto and Stanford University on internships in Japan. The Panel will also have brief remarks by a Japanese government representative regarding the efforts the Japanese government has been making to encourage companies and organizations in Japan to create internship opportunities for students abroad.

"Evaluation issues at the sites of internships in the U.S."

Yoshiko Higurashi, San Diego State University

One of the five "Shared Visions" set by San Diego State University (SDSU) is to create a genuinely global university. In order to realize this vision, a heavy emphasis was placed on the internationalization of our curriculum and development of abundant opportunities for our students to study abroad. Thanks to this emphasis, SDSU is currently offering 335 international education programs in 52 countries. 34 programs now require international experience for graduation. SDSU ranks first in California among universities of its type in California, third among all universities in California, and twenty-second No. 22 nationwide for the number of students studying abroad. There are approximately 1600 SDSU students studying abroad each year. The emphasis on international education realized a 900% increase in student participation in the past 12 years.

I have been in charge of exchange programs with universities in Japan since 1997. There are currently 20 direct exchange programs. Two additional institutions are expected to join and to be available by the Fall of 2014. We recently nominated 56 semester students who will study in Japan during the academic year of 2014-2015.

The number of academic degree programs that require study abroad for at least one semester has been increasing on campus. However, the Japanese language major has not been able to require study abroad due to students' economic situation. As the Director of the Japanese Language Program and Japan International Programs, I have been creating opportunities for Japanese majors who cannot afford to study in Japan to meet with Japanese people and work in Japanese workplaces.

In this paper, I will present ways to monitor our students at the internship sites, to evaluate students' performance, and, most importantly, how to obtain constructive criticism from internship providers and how to incorporate them into advising sessions for students.

"Developing linguistic and cultural competencies through situated learning"

Yuki Matsuda, University of Memphis

Internship and volunteer experiences offer an excellent "situated learning" experience for our students who are learning Japanese as a foreign language. Proponents of socio-cultural theories on learning consider this learning a function of participating in social activities. In this perspective, the focus is on learning by interacting with members of a community, who have certain common goals and purposes. For example, Japanese teachers and students can work together with the local Japanese business community to advocate Japanese culture to the local community and form a community of practice, in the sense of Lave and Wenger (1990). When our Japanese students start working as volunteers, their functions are limited at the beginning. Through interaction with more experienced members in the group, they will gain skills and become "legitimate" members of the community of practice.

With this theoretical assumption in mind, this presentation will focus on illustrating how the Japanese language learners at the author's program developed their linguistic and cultural competencies through participating in situated learning. Realistically not everyone can take advantage of international internship programs. Therefore, we offer various options. Our campus hosts a Japan outreach center, and we incorporate classroom activities with community-based outreach and internship programs. For example, the Japanese students will teach a variety of topics on Japanese culture to the local community by writing culture guides and Japanese local guides and upload them to the center's website. They also participate in planning committees with the local government for the outreach center and learn effective ways to advocate Japan. Such interactions allow our students to gain perspectives of the global environments where more than two cultures merge. This case study will be applied to any foreign language program and suggest a new direction for foreign language learning.

"One size fits ~~all~~ one: Managing internship host organizations in Japan"

Theodore Gilman, Harvard University

This paper examines managing diverse internship host relationships in Japan. Companies (large and small), government offices, universities, and non-profit organizations all make excellent internship hosts. However, maintaining relationships with these hosts takes time and energy. The paper provides case studies of typical host management situations. Regular correspondence, in-person visits, and clear written agreements can go a long way toward easing anxieties and establishing expectations on both sides.

Regular correspondence with a designated person in the host organization is important. Japanese administrative jobs normally rotate every three years, so creating institutional memory of the relationship between the participating organizations can be difficult. It is important to maintain year-round communication with the designated person in the host organization. Making internship management easy for that person is important, as they have other responsibilities. The less heavy lifting they must do, the better your internship will be.

In-person visits are essential to cementing the relationship. Such visits create a sense of organizational commitment to the internship. Visits need not be long – an hour of *aisatsu* is often sufficient – but they should be planned and executed formally.

Written agreements are crucial to the smooth management of an internship relationship. Different organizations will provide varying amenities. Each side must know who is responsible for what. Travel costs, housing, commuting expenses, and food costs are points of negotiation. Duration of the internship (start/end dates) and expectations of the intern should all be stated clearly.

Interns and their host organization supervisors complete online surveys at the conclusion of the internship experience. These data are used to prepare next year's internship students and to refine their expectations. We also use the data to suggest improvements to the host. Student feedback communicated gently to the host organization is the best way we have found to improve the relationship over time.

"Balancing quantitative with qualitative evaluations of student performance in internships at an overseas studies program in Japan"

Yoshiko Matsumoto, Stanford University, and **Andrew Horvat**, Josai International University

During the 25 years of the Stanford Kyoto Center's existence, a 10-week internship has been an integral part of the program. Every year, students and host organization staff have been asked to respond to surveys at the end of the 10-week internship period. Center staff members have made site visits usually halfway through the program. Because of staffing changes, the surveys and on site visits have not always been handled consistently. In 2011, 2012 and 2013, however, surveys were distributed and collected in a rigorous manner and on-site visits were personally carried out by the director in 2012 and 2013. From 2009 to 2013, students made presentations in front of an invited audience shortly before returning home. In the fall of 2009, 2010 and 2011, the most successful students were asked to repeat these presentations to peers on the home campus. After returning from Japan, students have often spoken about their internship experiences.

Drawing on all of the above quantitative and qualitative responses the former director of the program (Horvat) and the home campus faculty member most closely associated with the Kyoto program (Matsumoto) will seek to evaluate the advantages and disadvantages of the following types of feedback: (1) student and host organization responses to surveys, (2) on-site interviews with students and host organization staff, (3) student presentations of internship experiences, and (4) student comments made on the home campus in a variety of contexts about internship experiences. Discussion of these different types of feedback will focus on student evaluation of improvements (if any) in (a) language/culture competence, and (b) technical skills gained. Host organization feedback will be evaluated based on whether the organization accepts students as part of a corporate social responsibility program or as an HR recruitment tool.

SESSION 2-E: LITERATURE AND PEDAGOGY PAPERS [MEETING ROOM 411]

Chair: **Joanne Quimby**, North Central College

"Who is "I"? *Boku* or *atashi*?: Shifting personality and gender in Haruki Murakami's translations"

Rika Saito, Western Michigan University

This paper closely examines Haruki Murakami's Japanese translations of the acclaimed American novels, *The Great Gatsby* (1925) by F. Scott Fitzgerald (1896-1940), *The Catcher in the Rye* (1951) by J.D. Salinger (1919-2010), and *Breakfast at Tiffany's* (1958) by Truman Capote (1924-1984). In his translations of these novels, Murakami articulates the gender and persona of the characters in the original English texts in meticulous ways using various choices of Japanese personal pronouns and speech styles. Japanese literary texts generally include a variety of gender distinct dialogues, which are characterized by gender-specific first-person pronouns and sentence-final particles. Murakami's translated texts are not an exception; his texts are "overloaded" with gender. However, I will show how the gendered dialogues add a striking effect to the transformation of characters from English to Japanese.

Murakami's novels have been translated into more than forty different languages, and there are quite a few academic studies on his fictional and non-fictional works. Murakami himself has published many Japanese translations of various English novels such as the above, which were all commercially successful. However, to date, academics have paid little attention to those works he has translated into Japanese. In addition, there have been some feminist literary analyses on Murakami's works, such as *Norwegian Wood* (1987), *Sputnik Sweetheart* (1999), and *Kafka on the Shore* (2002), but feminist critiques have not been much applied to his translations. Therefore, my presentation will open new visions of research on this noted Japanese writer/translator.

"Discursive destructions: The obscene body in the fiction of Kanehara Hitomi"
David Holloway, Washington University in St. Louis

At the age of 21, Kanehara Hitomi took the Japanese literary world by storm with her novella Snakes and Earrings. Portraying a nineteen-year-old woman whose interest in body modification contradicts her haute-couture persona—all dyed blonde hair and designer bags—the work shocked readers for its exploration of Japanese subcultures. Readers were shocked further when this work, which reads more like popular fiction than something more substantial, began to garner the most prestigious prizes in Japan, among them the Akutagawa and Subaru, which are reserved for works that more commonly conform to notions of belles lettres. But, as I argue in this paper by drawing from theories of subculture, the body, and gender performance, Kanehara's exploration of body modification subculture and concurrent and less explicit concern with female sexual objectification and body image affords us the opportunity to think of this text in a new light, as it offers crucial insight into the nature of body politics in Japan today, particularly from a gendered perspective. In turning to tattoos and body piercings, Kanehara's protagonist challenges the very integrity of what constitutes feminine—and indeed what constitutes Japanese—praxis and performance of the body. I hold that Snakes and Earrings is not only an anthem of disaffection that speaks to Japanese youth, as has often been said of the text. Rather, below its surface, it is a reaction to the enforced performance of both personal and public identity, while at the same time it is a testament to the fluidity of the boundaries of the body.

"Fake names and hidden selves: Self-referential pronouns and narrative voice in Kirino Natsuo's *Real World*"
Joanne Quimby, North Central College

The alternating narrative voices in Kirino Natsuo's 2006 novel Real World (Riaru warudo) offer a glimpse into the inner workings of a group of female friends: their relationships with each other, their public and private personae, and the social tools each has developed in order to 'survive' high school in 21st-century Tokyo. Nicknames, self-reference, and public vs. private personae all play an important role in this novel, which presents us with four female narrators who choose different self-referential pronouns to convey "narrative voice" versus "social persona." That is to say, not only do the protagonists use different self-referential pronouns in their role as narrators (two use *atashi*/あたし, two use *watashi*/私), but three of the girls also use yet a different self-referential pronoun in daily life. Furthermore, the girls frequently use fake names in public situations, and each girl's narration also seems to reveal a sense of self that is completely at odds with her "apparent" role within the group. This paper will outline the various narrative voices and shifts in identity that contribute to this complex novel, and will explore the ways in which gender, societal expectations, and interpersonal relationships are implicated in pronoun choice and narrative voice.

「俳句学習の可能性ー上級クラスによる俳句ワークショップ」 (The poetics of learning: A student-led *haiku* workshop in advanced Japanese)
Aya McDaniel, Emory University

In the typical Japanese language classroom, the role of the student is that of a "learner," whose task is to absorb information and to improve their skills of Japanese. But what if the student is asked to take the role of "teacher"? How would this affect his or her confidence, and sense of Japanese language skills?

This presentation offers an overview of a haiku workshop that revealed some compelling answers to these questions. In Fall 2013, students in a college-level advanced Japanese class studied haiku history, poets, and theory, and practiced writing their own haiku verses in Japanese as part of a multi-week project. The capstone of the project was a workshop hosted by the Japanese program and open to all Japanese students. The workshop was led by the students, who took on the role of "teachers" of haiku composition to their peers in lower-level classes. After doing so, student "teachers" reported that they were able to deepen their knowledge, that their Japanese had improved, and that they had experienced a unique opportunity of taking initiative in the campus community.

My paper explains the procedure involved in this multi-week project, and discusses the implications of its results for the advanced Japanese language classroom.

SESSION 2-F: PEDAGOGY PANEL [GRAND BALLROOM C]

Chair: **Yong-Taek Kim**, Indiana University of Pennsylvania

Panel Title: **Applying Cognitive Linguistics to Japanese Pedagogy: State of the Art and New Directions**

Cognitive Linguistics (CL) assumes that language is a conceptualization and fundamentally grounded in human cognition (cf., DeLancey 1981, Lakoff 1987, Langacker 1987, Talmy 2000, Taylor 1989). CL has recently impacted L2 acquisition theories (cf. Taylor 1993, Achard and Niemeier 2004, Robinson and Ellis 2008), and researchers have started to empirically test its application to L2 teaching (CL approach) (cf., Csăbi 2004, Lam 2009, Tyler 2012, White 2012). CL approach is also claimed to promote highly effective classroom techniques (cf., Boers et al. 2004, Holm 2009, Littlemore 2009). However, its application to teaching JFL has been hardly investigated.

This panel discusses possible ways in which insights of CL, in particular a construal-based semantic map, the prototype theory, schematic representations, and lexicalization patterns, enhance Japanese language learning in the areas of transitivity, aspect, polysemous particles, and depiction of visual experience. Presenter 1 argues the efficacy of CL in pedagogical grammar with explicit teaching of the underlying motivation of transitivity by visually mapping Japanese intransitive and transitive sentences onto a construal-based semantic. Presenter 2 discusses the effectiveness of a prototype approach to verb semantics

by investigating its role in the acquisition of a resultative –*teiru*. She examines whether explicit instruction on the prototypicality of verbs is conducive to learning. Presenter 3 demonstrates that students who received explicit instructions of schematic representations of polysemous particles and their motivation in terms of a prototype approach tend to maintain their gains at the four-week delayed post-test, as opposed to traditional pictorial representations. Presenter 4 analyzes depictions of a visual experience in a fantasy novel in English and Japanese, and discusses how prototypical structural patterns can be introduced using visual references in a JFL classroom. Based on the findings, we discuss how a CL approach can contribute to JFL instructions.

"Applying cognitive linguistics to Japanese transitivity: Towards a semantic map model"

Yong-Taek Kim, Indiana University of Pennsylvania

Analysis of Japanese textbooks reveals that transitivity is described in terms of semantics (e.g., action/state), syntax (e.g., with or without an object), co-occurrence with '-te aru/-te iru' patterns, and lists of intransitive/transitive pairs (e.g., 'tomeru/tomaru'). However, this type of approach does not explain the motivation underlying transitivity.

Inspired by DeLancey (1981, 1987) and Talmy (2000), this study explores the Cognitive Linguistics (CL) approach, particularly a semantic map approach (Kim 2009) to Japanese transitivity, and proposes that explicit teaching of the motivation underlying transitivity is essential in the classroom. Kim (2009) argues that language has conceptual bases rooted in perception and cognitive construal. Construal allows one to view the same situation in a number of alternative ways. Construal is closely related to distribution of attention, which has two main patterns: focus of attention and windowing of attention. Focus of attention is placed on participants, and is typically encoded in the selection and arrangement of nominals. On the other hand, windowing of attention is a cognitive process to segment some relation(s) out of an event structure. It is typically encoded in predicate or adverbial expressions.

Windowing and focus of attention will be used to define the X- and Y-axes of a semantic map. The X-axis consists of five causal relations – Volition, Activity, Energy Transfer, Change, and State, on which attention is windowed. The Y-axis is composed of three types of configuration for the semantic roles of the participants – Agent, Agent-Patient, and Patient. I argue that speakers use transitive verbs to direct hearers' attention to both Agent and Patient, whereas intransitive verbs are used to direct hearers' attention to Agent or Patient. This explains why the same event can be expressed as 'Taro-ga kuruma-o tometa' or 'Kuruma-ga tomatta.' This difference can be illustrated by mapping intransitive/transitive sentence patterns onto the semantic map.

"A prototype approach to verb semantics: Teaching Japanese resultative '-*teiru*'"

Yumiko Nishi, University of Iowa

Research on the L2 acquisition of the Japanese imperfective '-teiru' has found that resultative '-teiru' is acquired later than progressive '-teiru', even though the frequency of resultative '-teiru' is much higher than progressive in native speaker conversation (Shirai & Nishi 2005). This developmental order has been explained by the 'prototype hypothesis' (Andersen & Shirai 1996), which predicts that progressive is the prototypical meaning of '-teiru' and resultative is less prototypical. However, recent studies have revealed a strong effect of L1 transfer on the acquisition of '-teiru' (Nishi & Shirai 2007; Nishi 2008). In particular, the accuracy rates of resultative items that involved L1-L2 discrepancies in lexical aspect (e.g., 'siru' [know] in Japanese is achievement; 'know' in English is state) were significantly lower than those that did not involve discrepancies (e.g., 'otiru' [fall] and 'fall' are both achievement), even at the advanced level. It is the specific L1-L2 verb correspondence pattern that determines the difficulty levels of '-teiru'.

Given the attested efficacy of cognitive linguistics in pedagogical grammar (e.g., Taylor 2008), the present paper proposes a prototype approach to verb semantics in order to facilitate the learning of resultative '-teiru'. Aspectual categories (activity, accomplishment, achievement and state) are claimed to be prototype categories (Shirai 1991), and the findings of the cross-linguistic analysis suggest that the notions that are lexicalized into one particular type of aspectual class regardless of the language may be the prototypical exemplars of that category (Nishi 2008). In the prototype approach, learners are given explicit form-focused instruction on '-teiru' based on the prototypicality of verbs identified in Nishi (2008). The effectiveness of the prototype approach will be discussed based on results from an empirical study that compared learners' performance in the experimental groups (prototype approach and traditional approach) and a control group, which received no explicit instruction.

"A cognitive linguistics approach to Japanese particles: Analysis and applications"

Kyoko Masuda, Georgia Institute of Technology

Japanese particles, particularly 'ni' and 'de', are difficult to acquire for first language learners (Clancy 1987) and for Japanese-as-a-foreign-language (JFL) learners (Masuda 2004). The difficulties stem partly from differences in how languages carve up spatial worlds and partly the nature of polysemous words. In a traditional classroom, meanings of polysemous words are taught in a piecemeal fashion, presenting usage without explaining how the meanings are related to each other. In a cognitive-linguistic-inspired classroom, however, attention is focused on core meanings first. The motivation of meanings and cognitive structure of polysemous words are explicitly taught. Langacker (2008) suggests it is important to first teach the prototypical uses and then the less-prototypical ones by relating them to prototypical uses. The purpose of this study is to examine the application of a cognitive linguistics approach, especially the use of schematic representation, by comparing the use of pictorial representation which is commonly used for teaching language.

Twenty-eight third-semester JFL learners received one of two treatments for reviewing polysemous particles 'ni' (existential, goal, time, purpose) and 'de' (location, instrumental, range, manner): a textbook pictorial presentation (TEXT) and a cognitive schematic presentation (COG). An explanation of prototypical and less prototypical uses was provided for COG. Two tasks (fill-in-the-blank and story writing) served to measure treatment effects at three points in time. Pair-work activities were used to facilitate learning in both classrooms. An attitude survey and interviews on methods were administered.

The findings of this study show general progress from pre- to post-tests. However, only COG students tended to maintain gains four weeks post-treatment, possibly due to in-depth analyses evoked by the use of concept-based schemata, prototype explanations and collaboration in pairs. Schemata seem to work by increasing learners' awareness of the difficult concepts and by sharpening awareness of the nature of polysemous particle functions.

"Understanding prototypical Japanese patterns through typological generalizations"
Sayaka Abe, Williams College

Verbalizing visual experience in a foreign language is challenging especially for native speakers of a structurally distant language. For example, English has rich vocabulary for expressing various manners of 'lighting', such as 'flicker', 'glimmer', 'sparkle', etc., which are often combined with a preposition to indicate a change, e.g. 'flickered into darkness', while Japanese tends to use a manner adverbial and a verb of change, e.g. 'yurayura to yami ni kie-ta' (not *yami ni + [a manner verb]). Without explicit knowledge of such general patterns in a foreign language, attempts of converting a conceptualized event into a string of words can only result in unproductive case-by-case corrections, which are in fact often observed in classrooms.

While cognitive semantics offers insights into understanding such typological differences (Talmy 1985, 2000b), little knowledge of the discipline is available to learners of Japanese. Furthermore, visual scenes are rarely described in traditional language instruction since they are considered too obvious or unpractical for everyday communication. However, utilizing the 'obvious' is beneficial for establishing a reference concept, for which the forms of different languages can be compared. Such materials include manga frames and narrated scenes from well-known stories.

Based on Talmy's 'lexicalization patterns' (ibid.), the present paper analyzes depictions of visual experience that occur in *Harry Potter* in English and Japanese, which contain many scenes with visual saliency and vividness that are easy to reference. The text data exhibit typological patterns systematically in terms of how certain semantic elements (e.g. 'manner', 'path') manifest structurally in prototypical contexts. This study further discusses how theoretical ideas from cognitive semantics can be made accessible through several steps and incorporated into translation and verbalization activities, based on insights gained from linguistics classes (in which certain tasks, in particular, recognizing semantic components, seemed difficult) and Japanese classes (intermediate and advanced levels).

12:30 a.m.–1:30 p.m. — Lunch Break

12:30 p.m. – 1:30 p.m.
SIG Business Meetings in Rooms 402/403, 404, and 407

Japanese for Specific Purposes (JSP): Room 402/402

Language and Culture: Room 404

1:30 p.m.–3:10 p.m. — Session 3

SESSION 3-A: PEDAGOGY PANEL [MEETING ROOM 402/403]

Chairs: **Stephen Moody** and **Maiko Ikeda**, University of Hawai'i, Manoa

Panel Title: **Empirically-Grounded Materials for Japanese Pragmatics Instruction**

This colloquium discusses Japanese pragmatics instruction with a focus on materials development. While pragmatic competence plays a vital role in overall L2 proficiency, studies repeatedly demonstrate that learners struggle to develop pragmatically appropriate language use. In response, a growing number of scholars have demonstrated that pragmatics are indeed teachable, even to beginning-level learners, arguing that instruction needs to be tailored to target specific pragmatic features.

However, in order to do this, teachers must have sufficient sociopragmatic and pragmalinguistic knowledge of the target pragmatics. For those not deeply involved in pragmatics research, these technical details may not be easily accessible. Thus there is a need to assist teachers and reduce their workloads by developing effective guidebooks and materials which integrate empirical pragmatic research into classroom teaching practices. To date, very few such materials exist and those that do primarily concern the teaching of English. In addition, these materials tend to neglect non-verbal resources, even though these are also necessary for appropriate sociopragmatic behavior. Furthermore, current materials emphasize face-to-face interactions, while new tools for communication such as e-mail and text messaging are quickly becoming commonplace modes of interaction. Lastly, the effectiveness of many of these materials has not yet been tested in the classroom itself.

The present panel, drawing from ongoing empirical research on Japanese linguistic and non-linguistic pragmatic resources, presents lesson plans and teaching materials covering several important pragmatic features which are not commonly treated in textbooks, but with which students have known difficulties. These include aizuchi, reactive tokens, and speech acts such as requesting. These materials have demonstrated useful via results of instructional interventions evaluating their application in the classroom. Approaches include explicit instruction, meta-pragmatic awareness-raising, communicative activities, video clips, worksheet exercises, and computer mediated communication, demonstrating the wide range of modalities through which pragmatics can be taught effectively.

"Doing "being a good listener": Developing multiple levels of pragmatic awareness of a*izuchi* among beginning JFL learners"

Sean Forte, University of Hawai'i, Manoa

In Japanese, aizuchi play a critical role in conversation. As verbal and non-verbal linguistic resources, they are employed for a variety of interactional and interpersonal functions and further help guide subsequent discourse trajectories. Yet, few studies have developed comprehensive materials for approaching aizuchi pragmatics in the classroom. The present study investigates the use of materials informed by empirical research studies and discourse and conversation analytic perspectives for facilitating beginning Japanese as foreign language (JFL) learners' pragmatic awareness and development with respect to aizuchi. These materials aim to 1) provide learners with opportunities to develop a communicative sensitivity to aizuchi as interactive resources, and 2) to investigate whether or not multiple aizuchi features (token type, function, frequency, timing/placement, prosodic contour, and gesture—nodding and gaze) are acquirable/accessible at a beginning level via such materials, and if so, to what extent.

The study focuses on an intact university-level second-semester class, and examines material usage over an experimental treatment consisting of two consecutive 50-min class sessions. Materials for the first session included warm-up L1 and L2 awareness-raising activities and discussion, and explicit meta-pragmatic explanatory handouts, while those for the second session included analytic guides for observing and discussing native-speaker model video clips. The study also discusses how these materials were developed, and how they may be used and/or adapted by instructors in their own JFL classrooms. The results of data from a pre-test, immediate post-test, and delayed post-test in comparison to those of a control group will be presented and the potential benefits of these materials in effectively facilitating beginning learners' receptive and judgmental knowledge and pragmatic development with respect to appropriate aizuchi usage will be discussed. Discussion will also include ways in which learners' pragmatic awareness developed differentially across features and the effectiveness of materials for teaching some features over others.

"Pragmatics instruction through awareness-raising and conversational practice: *Soo desu ne* and *soo desu ka* as reactive tokens"

Stephen Moody, University of Hawai'i, Manoa

Pushing beyond the notion that explicit instruction of pragmatics is primarily an awareness-raising activity, work by Yoshimi (2008, 2009) suggests instruction can facilitate the opening of a workspace in which students engage new information through a process of testing and experimenting with the interactive usage of new material, activating their own learner competencies in ways that result in more nuanced understandings. In this sense, when instruction is coupled with focused, extended conversational practice, learners more effectively realize gains in conversational abilities.

Building on this perspective of explicit instruction, the present study discusses materials for teaching the reactive tokens soo desu ne and soo desu ka, the proper use of which is fundamental for developing a natural interactive style. Used frequently in discourse, these items facilitate social interaction by displaying a listener's epistemic stance in relation to the speaker's presentation of information and assist in the co-construction of a shared dialogue. Proper use of these tokens effectively strengthens social interaction, while misuse can be jarring and disrupt the flow of a conversation. Developing an ability to use them in pragmatically appropriate ways is critical in early stages of Japanese study.

The materials presented here consist of assessment tools, worksheets to facilitate an explicit instructional session, and plans for an extended conversational activity. Results from a pilot study analyzing the effectiveness of the materials suggest that when instruction and materials are used to facilitate engagement with the target language, going beyond simple awareness-raising, students may realize gains that extend beyond the narrow scope of the specific feature being taught. Thus this study contributes to materials development by arguing that plans for teaching pragmatics are more likely to be successful if they facilitate involvement with communicative practice, rather than try to present a catch-all set of rules and guidelines.

"Materials for the development of learners' electronic literacy through requesting in Japanese emails"

Maiko Ikeda, University of Hawai'i, Manoa

Due to wide proliferation of technology Computer Mediated Communication (CMC) has become a daily mode of communication, and educational settings are no exception. In particular, email is a vital means for communication between students and professors. However, previous research has reported that students struggle to produce appropriate emails to those of higher status in institutional settings (Baron, 1998). In particular, students have difficulty composing requests properly because they have to adopt suitable resources to meet the recipient's status and the degree of imposition. Indeed, even native speakers have difficulty making appropriate requests in emails, and for learners of foreign languages, it is an even greater challenge. Japanese, in particular, has a rich repertoire of resources such as verbal morphemes to mark social status and adjust for imposition, and students must learn to use the proper resources for writing socially acceptable request emails.

Studies on learners' performance in CMC have shown that pedagogical interventions are necessary to help L2 learners develop electronic literacy. However, there is a lack of Japanese CMC research, few pedagogical materials based on

natural email communication, and no effective instruction with empirically proven results. As a result, it is not easy for teachers to offer effective instruction.

To fill in this gap, 55 authentic request emails from Japanese university students to professors were analyzed using conversation analytic methodology to identify the necessary elements that comprised actual requests. Based on these findings, materials were designed to incorporate these authentic features and reflect effective teaching methods grounded in empirical research. The effects of these materials were evaluated using pre- and post-tests and observation of 30 intermediate learners' actual engagement with the materials.

The results revealed that the materials enhanced learners' awareness of the necessary resources for request emails to professors and showed that they successfully learned to perform more appropriate requests.

Discussant: **Yumiko Tateyama**, University of Hawai'i, Manoa

SESSION 3-B: PEDAGOGY PANEL [MEETING ROOM 404]

Chair: **Shigeru Osuka**, Seton Hall University

Panel Title: **「マルチメディア社会での新しい作文指導法と評価に関する総合的研究」 (New Teaching Methodology and Assessment for Japanese Writing in a Multimedia Society)**

本パネルでは、マルチメディア社会での新しい作文指導法と評価に関する研究についての発表と討論を行う。特に、ACTFL National Standard for Foreign Language EducationやACTFL Writing Proficiency Test (WPT)を考慮しながら、日本語学習者を支援する為の教授法や評価について総合的に考えてみたい。先ず、第一発表者が「書く力」指導の体系化を目指したカリキュラムのデザインと評価と題して、日本語クラスで使用している課題提出、自動採点、成績記録をデータ処理できる教材開発と、その実施に伴う問題点や観察された学習効果、更に学習後のアンケート結果などを分析し、作文指導の評価や課題について考察をする。次に、第二発表者がピア・レスポンスで使用する評価表が学生に及ぼす影響の考察：上級日本語学習者の作文作成過程からの実践報告と題して、マルチメディア社会の中で、学習者の自律を促し、評価表が学習者に「気づき」をもたらすことについての半年間の実践活動の報告をし、学習者の態度が教師の望む方向に変化した様子と評価表がどのように関わったのかを考察する。次に、第三発表者がデジタル・ストーリーテリングを使用した作文指導法と評価についての考察と題して、学習環境の変化している新しいメディア社会の中での作文指導法や評価法を再考し、初級クラスでの視覚や聴覚を含めた総合的な「書き言葉」の新しい作文指導法とその評価について考察をする。最後に、第四発表者がe-Portfolioの一環としての作文指導：その評価方法と今後の課題と題し、学習者がe-Portfolioの一部としてiMovieを使ったAuto-biographyを作成した実例を紹介しながらその評価方法について考察をし、更にCan-do Listを使用した学習者アンケート調査の結果や、作文とe-Portfolioについての課題も検討をする。

「「書く力」指導の体系化を目指したカリキュラムのデザインと評価」 (Development and assessment of a new writing instruction system incorporated in a curriculum)

Masami Ikeda, Massachusetts Institute of Technology

基本的な文法項目や語彙を習得した中級以降の学習者には、単文レベルの表現や正確さを越えた作文指導が必要になる。特に重要なのは、全体のまとまりの中で段落構成や議論の展開を考える力の養成だと言われるが、文法的に正しく、内容、構成ともに優れた作文が、口語表現を使用しているために幼稚な印象を与えてしまう例も少なくない。従って中級以降のレベルでは、より複雑で抽象的な内容に見合った「書き言葉」特有の表記法や語彙の指導も不可欠であるが、従来の会話主体のカリキュラムにこれらの指導を加えるのは、時間的制約が大きく困難だという実情があった。このような背景から、「書く力」養成をカリキュラムの中に体系的に組み込むことを目指し、テクノロジーを最大限に利用した「書き言葉」の指導法を開発し、2012年春学期より試みている。教材作成のために使用したプログラムには、オンラインでの課題提出、自動採点、成績記録のデータ処理だけでなく、学習者の弱点分析と教材の改善点解明もできる機能が備わっている。このオンライン教材の開発により教師は、従来の授業活動時間やカリキュラムを削ることなく効率的に「書き言葉」の導入が出来るだけでなく、テクノロジーでは扱えない部分、つまり作文を書く過程の指導や添削などに集中することが可能になった。本発表では、「書く力」指導の体系化を目指して考案した新カリキュラムの概要を紹介し、教材開発と実施に伴う問題点、観察された学習効果、学習後のアンケート結果などを分析しながら、今後の作文指導の評価や課題についても考察してみたい。

「ピア・レスポンスで使用する評価表が学生に及ぼす影響の考察：上級日本語学習者の作文作成過程からの実践報告」(The influence of some evaluation sheets used for peer response on advanced learners of Japanese writing process)

Kiyoshi Noguchi, Sophia University

日本語の作文作成過程におけるピア・レスポンス（PR）の有効性に関しては、作文プロダクト、活動プロセス、作文プロダクトと活動プロセスの関係、意識・参加態度の変容等において様々な報告がなされている（池田・原田2008）。しかし、一方で課題も多く残る。その一つは、学習者の個人差の問題である。自身の経験からもPRに積極的に参加しない学生、活動プロセスよりプロダクトを重視する学生、PRよりむしろ教師のフィードバックを求める学習者等々の存在が指摘できる。このような学習者には、PR活動の意義を十分理解させることが欠かせない（池田・原田2008）。PR活動前にガイダンス

をするという方法が効果をあげたという報告がある（跡部2011ほか）が、そのガイダンス時間は2時間から７時間と長く、それだけの時間がかけられない現実問題もある。また、PR活動前にそれだけの時間をかけることの効率性にも疑問が残る。より効果的な方法はないのであろうか。具体的記述のある評価表は学生の内省を容易にさせるとの報告もある（Schamber & Mahoney 2006ほか）。もし、そうであるならば評価表が学習者の「気づき」を促し、学習者のPR活動への考え方を比較的容易に変化させることができるのではないだろうか。本発表では、この可能性を探ることを主な目的として行った半年間の実践活動の報告をしてみたい。今回の実践活動を通し、学習者のPR活動に対する態度が教師の望む方向に変化した様子とそれに具体的記述のある評価表がどのように関わったのかをいくつかの根拠をもとに考察をする。併せて、先行研究との同異、課題等に関しても報告をしてみたい。

「デジタル・ストーリーテリングを使用した作文指導法と評価についての考察」 (Japanese teaching methodology and assessment for digital storytelling in Japanese writing)
Shigeru Osuka, Seton Hall University

日本語教師はマルチメディア社会の中で多様な新しいテクノロジーの機器やプログラムの使用の機会を与えられているが、実際には急速なプログラムの開発や変化の中で、それを使用した実践や評価等が十分に行われていない現状が窺える。従来の日本語作文教育では、学習者が題材に基づき作文を書き、それを教師が添削し作文の書き直しを何度かして作文を仕上げるのが一般的な作業であったと思われるが、社会環境の変化に伴い作文の指導法や評価法も変化する必要があると思われる。基本的な作文教育は変わらないと思うが、手書きからワープロへ、漢字の書きの練習や暗記から適切な漢字への変換へ、作文用紙から実際に使かう書き言葉をテキスト・チャットやE-メール等での表現へと、作文教育の目的や使用の用途も変化してきている。最近の作文教育では、画像・音楽・ナレーションを入れて、作文を字幕に入れたデジタル・ストリーテリング(Digital Storytelling)を利用した作文教育等もおこなわれている。また、デジタル・ストリーテリングは、インターネット上で発表出来きる機会を提供してくれている。現在は、従来の作文教育から視覚や聴覚を含めた総合的な「書き言葉」の日本語教育が必要な時代が到来していると思われる。本発表では日本語初級クラスでのデジタル・ストリーテリングのプロジェクトを通して日本語初級作文教育の目的・評価法・問題点についてACTFL National StandardやWPTを含め再考し、マルチメディア社会での日本語学習者を支援する教授法と評価について考えてみたい。

「e- Portfolio の一環としての作文指導–その評価方法と今後の課題」 (Teaching "sakubun" as a part of e-portfolios: assessment methods and beyond)
Naoko Ikegami, Lafayette College

本学では、全ての言語で、初級レベルから学習者の学習履歴をe-Portfolioに記録するプロジェクトが行なわれている。つまり、学習の目的、内容、成果、知識等の学んだもの全てを記録し、履歴書としてのe-Portfolioの導入が勧められてきた。日本語でも2009年より学習者にiMovieを使ったAuto-biographyを作成させ、学期毎にその記録を提出させ残してきた。このAuto-biographyは、将来のe-portfolioに繋がるものであり、学習者にはそれぞれのレベルに応じて内容を広げて行くように指導してきた。本発表では、先ず、このAuto-biographyの作業の第一段階としての作文作成に関して、その評価

方法を考察してみたい。次に、e-Portfolioの導入と並行して、学部内でACTFLやCEFRなどを基本にした本学オリジナルのCan-do Listを使用した、学習者アンケート調査の結果を考察したい。このCan-do Listでは、到達可能な目標が具体的に掲げられており、学習者が一学期分の学習目標、学習成果、

自己の成長を振り返ることができるため、現実的な達成感を実感することができているかも視てみたい。Can-do Listは自己評価を行ない、前述のVideo Auto-biographyと共にe-Portfolio作成の手助けとなり得ると思われる。更に、本発表ではこの二点について実例を紹介しながら今後の課題なども考えて行きたい。

SESSION 3-C: PEDAGOGY PAPERS [MEETING ROOM 407]

Chair: **Keiko Okamoto**, Columbia University

「ドラマを通した日本語の教育：「～てもらう」について再考」 (Teaching through Japanese TV drama: A reexamination of the highly contextual related structure *te-morau*)
Yunchuan Chen, University of Hawai'i, Manoa, and East-West Center

"te-morau" is one of the notoriously difficult Japanese structures to teach because its interpretation is highly contextual related whereas the textbooks are often limited in providing rich contexts. In that case, Japanese TV drama would be an alternative teaching tool because of its vivid scenes and compelling story-lines. This talk has mainly two parts. First, simple methods about how to collect Japanese TV drama scripts as a temporary corpus and how to single out the target structure from it will be discussed. Considering the proficiency level of the students, we can select different kinds of conversations around the target structure from the drama. When interpreting the target structure by watching TV drama scenes, the students are more likely to link its use to the immediate contextual cues.

In the second part of the talk, I will focus on the structure of "te-morau" and argue that its interpretation, within the TV drama scenes, may not necessarily be related to the self-benefiting action (Marynard, 1990) or the action of receiving and giving favor (Makino et al. 1989). It might be more relevant to other actions such as negative politeness strategy (Brown and Levinson, 1987). Since the meaning of the "te-morau" structure varies a lot in different contexts, simple explanations within a

sentential context might be insufficient. Therefore, teaching "te-morau" within TV drama scenes may be a useful method since it can provide students with abundant contextual cues that contribute to various interpretations of the structure.

「音読活動を通して円滑なコミュニケーションを目指す」(Facilitating smooth communication through vocal reading)

Keiko Okamoto, **Miharu Nittono**, and **Yoshiko Watanabe**, Columbia University

学習者のレベルが上がるに連れ、アクセント・イントネーション・プロミネンスといった韻律の不自然さが顕著になり、「音声教育」のニーズは高まるとの指摘がなされている。事実、我々の中級レベルの学生の会話に於いて、韻律の不自然さにより誤解が生じ、円滑なコミュニケーションを妨げている例がしばしば見られる。また、発音上の問題がコミュニケーションの弊害になっているとの認識を学習者が示していることも明らかになった（戸田2008）。一方、学習成功者は発音学習に対する意識・学習方法・インプットの量などの理由に支えられて高い発音習得度を達成したことが示唆された（戸田2008）。このことから我々は音声教育の重要性を再認識し、円滑なコミュニケーションを目指すために音声教育を体系的、計画的、かつ継続的にコースデザインに組み入れることにし、中級の学生を対象に２年前から音読を中心とした様々な試みを行って来た。

その結果をふまえ、2013年秋学期からはより効果的な方法を探るべく、以下の手順を踏むことにした。

1　日本語の基本的な音声体系の紹介
2　学生は読み物のモデルを聞き、音読、録音
3　教師による紙の評価表と「声」のフィードバック
4　拍、アクセント核、特殊音を中心にした個人指導
5　学生はそれらのフィードバックを基に、同じ読み物を再度音読、録音
6　３を繰り返す

この試みを始めて２ヶ月足らずではあるが、すでに特殊音や拍、アクセントなどに対する学生の意識の向上が顕著に見られる。

発表に於いては、上記の一連の音読活動を通して得られた韻律に対する学生の意識が会話に於いてどのように反映され、円滑なコミュニケーションに繋がるか言及する。

「映画を『作って』学ぶ：アフレコプロジェクトの実践報告」(Into the screen: Report on a voice-over project)

Miki Yagi, Harvard University, and **Emi Mukai**, Stanford University

近年テクノロジーを利用した外国語教育が注目されているが、内容の適切度、学習者の満足度、言語の正確さ、コミュケーション能力を総体的に統合した言語学習プロジェクトに近づけるにするにはどういった工夫が必要だろうか。今回、リベラルアーツ大学の学生を対象に、日本語学習１年目の後半にアニメ映画を使用したアテレコプロジェクトを行い、その結果を通して今後テクノロジーを使った日本語教育にはどのような方法が有効か検討する。

初級１年目後半でプロジェクトに映像テクノロジーを使う利点は、学習者のペースや必要性に合った使い方ができるということがある。さらに、学習者になじみのあるアニメ映画を題材に使うことで、言語学習の満足度と達成感が得られるという点も大きいだろう。

また、このプロジェクトには、教科書以外の教材を使うことでの学習者の言語意識の向上を促し、さらに、野呂(2009)が述べるように、教科書のモデル会話だけを用いて学習するだけでは身につきにくい「自然な会話」、つまり言語運用の流暢さ、アクセントなど音韻、フィラーなどの会話ストラテジーに注目させるという目的もある。親しみのある題材を選ぶことで、それまでは「受身」でとらえていた言語意識を実際に「会話を行う側」へと変えさせることができ、１年生後半という比較的早い時期から「非言語要素」の習得にもつなげることができるのではないかと考える。

本プロジェクトを通して、学習者の日本語学習の意欲の向上、教師の役割と介入、学習者の言語面の限界について問うと共に、プロジェクトとしての適切さなどへ問いかけ、今後のテクノロジーを使用した日本語教育の利点と課題を提示する。

"Japanese learners' awareness of pitch accent and intonation and its influence on their oral performance and study habits"

Yui Iimori, Ohio State University

Pitch accent and intonation are essential in communicating fluently in the Japanese language system. Yet, teaching pitch accent and intonation is often neglected when learning it as a foreign language. This study investigates whether awareness training in pitch accent and intonation can improve Japanese language learners' oral performance, self-monitoring skills, study habits, and confidence. Pitch accent and intonation awareness training was given to one section of the first-year Japanese language class, randomly chosen from seven sections. The training involved review and drills of mora, pitch accent, and intonation, and their performance was recorded. The training also involved recording practice using a computer program that allowed participants to listen to the audio, record themselves, and compare their performance. Another section of the first-year Japanese class was randomly selected as a control group, which did not receive any training. Both groups were asked to complete surveys in order to draw comparisons between the two. These surveys were conducted to investigate how Japanese learners prepare for class, their focus and attention on pitch accent and intonation, how well they could detect their own errors, and the effect of these factors on their average daily grade and their confidence in Japanese proficiency. The result showed that students rarely focused on pitch accent and intonation when they prepared for the class before the awareness training. All participants indicated that they paid attention to pitch accent or intonation in some aspect of their study or class performance; however, hardly any students indicated that they were able to identify their intonation errors. On the other hand, while they still made

pitch accent errors, nearly half the participants indicated that they were able to identify those errors specifically. The presentation will show changes observed in learner awareness about pitch accent and intonation.

SESSION 3-D: SECOND LANGUAGE ACQUISITION (SLA) PAPERS [MEETING ROOM 408/409]

Chair: **Noriko Fujioka-Ito**, University of Cincinnati

「日本語母語話者と韓国人・中国人日本語学習者のパーソナル・テリトリーに関する認識と発話に関する対照研究」
(Contrast study on recognition and utterances about personal territory of Japanese native speakers and Korean and Chinese learners of Japanese)
Myeongja Heo, University of Tsukuba

日本語母語話者と韓国人、中国人に保護学習者の間には聞き手のパーソナル・テリトリーに関する認識に違いが存在しており、それによるコミュニケーション・スタイルの違いも存在する。日本語母語話者と日本語学習者の間のパーソナル・テリトリーやコミュニケーション・スタイルの相違点は相互の誤解や摩擦につながることもあって、日本語によるコミュニケーション活動に支障をきたすこともある。本研究では、日本語母語話者と日本語学習者のパーソナル・テリトリーに関する認識について分析し、日本語教育現場への応用について考察を行う。

上下関係、親疎関係が明確な聞き手に対して、パーソナル・テリトリーに関連する内容について言及するか否かについて調査を行った。言及する場合には、どのような内容について言及するのか、また、どのような表現形式を用いるかについて調査を行い、比較分析を行った。

その結果、韓国人日本語学習者は相手の外見に関する言及が多く、出身大学や英語能力等のような評価に関わる内容は言及しない傾向が見られた。一方、中国人学習者は所有物や出身大学に関する内容は言及するが、結婚や家族等の個人情報に関わる内容については言及しないという傾向が見られた。それに対して、日本語母語話者は家族や年齢について韓国・中国より言及するのに対して、全体的に言及する割合が低いことが分かった。

以上の結果から日韓中の間にはパーソナル・テリトリーに関する意識に明らかな違いが存在し、それがコミュニケーション・スタイルの違いにも影響していることが考えられる。

"Cultural encounters in conversation: How culture is explored in conversations for learning"
Erica Lea Zimmerman, United States Naval Academy

Using conversation analysis, this study investigates conversations for learning (Kasper 2004) of learners of Japanese and their Japanese interlocutors to examine talk about Japanese and American culture. The main premise of this study is that for cultural and linguistic acquisition, it is not just physical time spent in country that will make a difference. Interaction with members of a society is essential for development, and more specifically, conscious engagement with members (i.e. recording one's talk, reflecting on those interactions, and post program reflections) is important for developing one's cultural and linguistic competence. The analysis for this project examines three segments of audio recorded conversations of learners and the people they met such as friends, colleagues and acquaintances during a semester study abroad experience. This audio recorded data is non-scripted and the learners were asked to write self-reflection journals. Further analysis examines if the participants are displaying cultural awareness through discussions of cultural products, practices, and perspectives (National Standards in Foreign Language Education Project, 2006). Based primarily on the audio recordings and self-reflection journals, this project will focus on answering the following questions:

1. Using conversation analysis of audio recorded data in conversations for learning (Kasper 2004), what is uncovered about the learner's and native speaker's understanding and construction of culture?
2. Do learners engage in cultural talk indicating practices, products, and perspectives? If so, how does this occur?

The findings of this study will show how culture is co-constructed in in the learners' language while on study abroad. In addition, it will provide suggestions for preparing future learners and guiding them through their own study abroad experience. Conclusions discuss the impact of these conversations on the participants' cultural awareness.

"Japanese dialect and discursive positioning: The opinions of L2 speakers and their L1 counterparts"
Jae Takeuchi, University of Wisconsin, Madison

Most second language (L2) speakers of Japanese encounter Japanese Dialect and will need to negotiate its understanding. When they live in regions where dialect use is prevalent, L2 speakers must also negotiate choices between Standard Japanese (SJ) or Japanese Dialect (JD); their opinions about SJ and JD are likely to inform the choices they make. Numerous studies examine first language (L1) speakers' opinions about JD; however, few studies address how L2 speakers view JD and how they choose between JD and SJ in various contexts. To address this gap in the literature, I examine a group of L2 and L1 speakers and their opinions about Japanese Dialect.

Primary participants are L2 speakers who are current or former residents of Ehime, Japan. Secondary participants are L1 speakers with professional or personal connections to the L2 participants. The data consist of semi-structured, open-ended interviews with each participant, supplemented by field observations of participants' daily life activities. Both L2 and L1 participants convey diverse ideas and opinions about dialect, demonstrating that the role dialect plays in the linguistic daily lives of participants is both dynamic and complex.

Thematic analysis of participants' opinions about Japanese Dialect draws on positioning theory (Davies & Harré, 1990), which views positioning as a discursive process that occurs in and through language use. The analysis of L2 speakers' views about dialect examines how these L2 speakers position themselves as Japanese language speakers and as members of local

communities. The analysis of L1 speakers' views about dialect offers insight into the role that L1 speakers play in the discursive positioning of L2 speakers.

This study addresses the gap in the literature on JD and L2 speakers and suggests pedagogical implications for the teaching of Japanese as a second or foreign language.

"The perception of Japanese sentence-final particles by L2 learners of Japanese"
Rie Maruyama, University of Arizona

Sentence-final particles (SFPs) are crucial in Japanese conversation, and thus the acquisition of these particles is a must in order for learners of Japanese to be able to communicate appropriately. What we know about the acquisition of Japanese SFPs by L2 learners is that these particles are difficult to acquire (Horiike 2007), L2 learners use them much less frequently than native speakers, there is a developmental sequence for L2 learners' use of these particles (Masuda 2011; Ohta 2001), the acquisition of such particles seems to begin with the formulaic expressions (Sawyer 1992), and there is great individual variation among learners on this feature. What haven't really been looked at are whether L2 learners can correctly understand the function of SFPs used in a conversation even if the learners cannot or do not use them in their utterances, and how much the L2 learners are aware that different intonations of SFPs can convey different meanings. Therefore, the present study investigates the acquisition of Japanese SFPs from the perspective of L2 learners' perception of the function of SFPs in conversation. The participants are L2 learners of Japanese (elementary to advanced levels) and native speakers of Japanese. In the survey, participants listen to short conversations that include either correct or incorrect use of SFPs, and rate how natural or unnatural each conversation is. In the analysis, three research questions are examined. 1) How do L2 learners and native speakers of Japanese perceive the function of the SFPs similarly or differently? 2) What factors affect the development of learners' understanding of the SFPs? 3) Is the developmental sequence for the perception of Japanese SFPs similar to one for the production? Based on the findings, pedagogical implications are discussed.

SESSION 3-E: LITERATURE PANEL [MEETING ROOM 411]

Chair: **Catherine Ryu**, Michigan State University

Panel Title: **Toward a Theory of Cultural Translation: Rewriting Love, Loss, and Imaginary Space in *Genji Monogatari***

This panel seeks to read Genji monogatari through the new critical lens of what we term "cultural translation." This notion broadens the conventional parameters of linguistic translation to include any transformative action that alters the cultural signification of an already existing cultural product. The panelists illuminate a set of cultural translation strategies as employed by Murasaki Shikibu, the author of Genji monogatari, and as mobilized by readers of this narrative. Sarra challenges the critical consensus that Genji's Rokujō mansion embodies an idealized version of the emperor's rear court. Drawing on models of aristocratic housing from Utsuho monogatari, she analyzes the architectonics of Genji's house as a cultural translation of some of its overlooked fictional antecedents. Ryu utilizes game theory as a potent cultural translation tool to examine the last heroine of Genji monogatari, Ukifune. Ryu thus newly calibrates the significance of the author's strategic employment of Ukifune's silence in the tale, while broadening critical practices in Genji scholarship, largely situated in conventional disciplinary and area studies parameters. Peterson focuses on the legend of Yang Kwei-Fei in Genji monogatari and Yoru no Nezame (YN). Her analysis of the visual imagery of the legend in YN highlights the discrepancies between the idealized world of painting and the tangled realm of the tale, thus illuminating how, and why, a legend with substantial cultural currency is transformed. Ramirez-Christensen discusses the resonance among the three papers, delineating larger theoretical implications of cultural translation on current interpretive practices in Japanese cultural and literary studies.

"The architecture of polygamous cohabitation: Genji's Rokujôin as a transformation of the Irogonomi no ie"
Edith Sarra, Indiana University

Genji's splendid Rokujôin, the house at the center of the Tale of Genji, conspicuously embodies one of the junctures at which the Genji diverges from realistic portrayal of Heian social practices. Part of that divergence has to do with who inhabits the mansion with Genji. Emperors regularly lived in the same compound with multiple wives, but the non-royals of mid Heian normally did not. Heian fiction, however, was free to explore such fantasies. There is a critical consensus on the meaning of the Rokujôin as a structure that both mimics and rivals the imperial palace, compensating Genji for his lost birthright as a prince. Taking cues from sociologists of space and historians of Heian marriage, I analyze how Genji's mansion transforms a non-royal lineage of fictional house-types abundantly detailed in Utsuho monogatari (late tenth century). Paying particular attention to who owns the houses in question, who authorizes their construction, and where individual members of these unreal households are placed, I suggest a new way of understanding the significance of Genji's architectural exuberance. What emerges is a reading of the Rokujôin that answers to the Genji narrative's complex rendering of the patrilineal will in relation to multiple matrilineal interests, of negotiations between living and dead tenants, and of class and gender divisions within the household.

"Gaming *Genji Monogatari*: Rethinking Ukifune as a supreme game strategist"
Catherine Ryu, Michigan State University

Genji monogatari (early 11th- century) is a veritable encyclopedia of Heian love games. Of all the key characters who participate in the games with varying degrees of success and failure, Ukifune is arguably the most memorable one. If nothing else, she is a puzzle—a gamer who joined the game clueless but then willfully refused to play. More precisely, it is puzzling why

the author, Murasaki Shikibu, should have included such a game spoiler, after having taught the reader how to detect and appreciate subtle moves and nuances in the art of seduction and persuasion. Indeed, why did the author attribute such a degree of narrative attention and power to this beautiful but unassuming character—an unrecognized daughter of the Eighth Prince in self-exile—that Ukifune's refusal to stay in the game literally halts this expansive tale of three generations?

This study attempts to solve this puzzle. Drawing critical inspiration from Michael Suk-Young Chwe's Jane Austen, Game Theorist (2013), I analyze the process of Ukifune's journey of self-discovery as a female strategist. In stark contrast to her initial admission to the game of love only as a "plaything," Ukifune masterfully conceptualizes her exit strategies and carries them through with drastic effect on all involved. What this new perspective brings into focus is, in Chwe's term, "strategicness" as a new critical category for character analysis. This paper ultimately illuminates the Heian author's criticism of love games that women were expected to play by rules not of their own making.

"Images of everlasting sorrow: Re-translation of the Yang Kwei-Fei legend in *Yoru no Nezame*"

Joannah Peterson, Indiana University

In this paper I explore the use of visual imagery in Yoru no Nezame (mid-eleventh century), focusing on the re-translation of the image of Yang Kwei-Fei, the infamous Chinese beauty blamed for the fall of the Tang Dynasty. I examine a compelling instance of mise en abyme, a literary device that Lucien Dällenbach defines as "an organ of the work turning upon itself…as a modality of reflection." This occurs when the Emperor glimpses the heroine, Nezame, herself looking at a painting of Yang Kwei-Fei, and she is transformed into the image of Yang Kuei-Fei in the Emperor's eyes. This scene brings to bear two texts that feature allusions to Yang Kwei-Fei: "The Song of Everlasting Sorrow" by Po Chu-i and the most celebrated of Heian tales, Genji monogatari. The Yang Kwei-Fei legend is appropriated in the opening of Genji, as non-satiric parody dramatizing the Emperor's loss of his favorite consort. However, in Yoru no Nezame the legend is used for satirical effect; the object of satire being the Emperor's obsessive love for a women who does not reciprocate his passion.

The familiarity of Nezame's author with Genji monogatari is apparent by the many instances of near-quoting, yet when this avid Genji reader fashions her own tale, we see a legend with substantial cultural currency re-translated: the pathos of an Emperor lost in sorrow is portrayed as misguided rather than moving, effectively highlighting the discrepancies between the idealized world of painting and the tangled web of relationships in the tale.

"Hashihime: Beyond text and image in the "Illustrated Tale of Genji"

Kendra Strand, University of Michigan

This paper analyzes the ways in which meaning is created in text, image, and materials of the "Hashihime" chapter of the *Illustrated Tale of Genji* (late 11th c.), an interpretation of the then century-old *Tale of Genji* (early 11th c.). In "Hashihime," as in the other extant chapters of the *Illustrated Genji*, brief excerpts from the *Genji* are inscribed on richly decorated paper, and are followed by a painting that corresponds precisely to the text. Indeed, readers of the *Genji* will immediately recognize the scene of Kaoru peering though the gaps of a fence to watch the Uji princesses in the moonlight. However, in comparison to the *Genji* as a base text, the text of the *Illustrated Genji* is elliptical at best. The use of poetry, too, demonstrates that familiarity with and memory of the *Genji* play a key role in reading the *Illustrated Genji*. Thus, meaning in the *Illustrated Genji* is created not through simply juxtaposing textual and visual elements, but through the combination of text, image, calligraphy, and material elements, as each relates to and stands out from the others. A combined textual and formal analysis, then, illuminates the role of non-linguistic signs in the development of the events and characters in the *Illustrated Genji*. Kaoru's character development in particular, visible through textual and extra-textual elements, shows how the *Illustrated Genji* constructs a very different but equally complex and subtle language of psychological interiority with regards to the already well-known narrative and characters of the *Genji*.

Discussant: **Esperanza Ramirez-Christensen**, University of Michigan

SESSION 3-F: SIG PANEL ON AP JAPANESE [GRAND BALLROOM C]

Chair: **Yoshiko Mori**, Georgetown University

Panel Title: **「高等教育機関から見た AP Japanese の意義と課題」 (Issues in AP Japanese: A Higher Education Perspective)**

2006-7年にAP Japaneseが初めて導入されてから、毎年二千人前後の高校生がAP Japanese Examを受けており、受験者数は緩やかではあるが着実に伸びている。AP Japaneseの導入は、学習者から見ると、大学の単位として認定される、大学卒業までの時間と費用を短縮することができる、より高い日本語力を身につけることができるなど数々の利点があるが、教育機関、特に高等教育機関から見たAP Japaneseの意義の議論はさほど多くない。その理由として、大学がAP Japaneseを開講しているわけではない、APの単位認定はAdministrationで行なわれ、日本語を教える教員が直接関わっているわけではない、そのため大学の教員はAPの学生がどのような言語力や学力を身につけて大学に入っているかをよく把握していないなどが挙げられる。しかし、AP Japaneseの導入は、大学とそれ以前の教育機関との連携が深まる、より高い日本語力と学習意欲を持った学生が入ってくる、上級者のニーズに答えるべく大学の指導内容や開講コースを充実させることができるなど、大学から見ても様々なメリットが考えられる。

このような観点から、本パネルでは、高等教育機関から見たAP Japaneseの意義と課題を考える。パネル１では大学のAdministratorの立場からよりよい学生を集める上でのAP Japaneseの意義を考察する。パネル２ではAP Japanese の単位認定に関する問題点とこれからの課題を議論する。パネル３では先行研究を展望し、APの学生がどのような力を習得しているのか、大学での学習にどう有利なのかを探る。パネル４ではAPの学生の日本語力をさらに伸ばし、社会の期待する力を習得させるような大学でのカリキュラムのあり方を考える。

"Getting bigger, getting better: Strategies for language and culture programs"

Kimberly Jones, University of Arizona

Student numbers are becoming ever more important today given the scarce financial resources available to most institutions of higher education. Increasingly, post-secondary departments that teach languages and cultures are under pressure to demonstrate growth in the number of students taking their courses and majoring in their programs. In this paper, I describe concrete strategies used at one U.S. university to recruit students to departments that focus on the study of languages and cultures. I show the changes in the numbers of majors, minors, and language students over the first several years these strategies were in place and compare them with those from similar programs that did not make recruiting a priority.

Specific strategies described include building collaborative programs with other units on campus at both the undergraduate and graduate levels; reaching out to high school teachers, principals, and students to build a "pipeline" of students to the university; and letter-writing campaigns targeting current undergraduates identified as high performers in entry-level classes. In particular, teachers at secondary and post-secondary institutions are natural allies in this quest to increase the number of students studying in our programs. High school programs such as IB and AP lead students to achieve relatively high levels of language proficiency before they advance to post-secondary studies. Addressing institutional policies on the granting of credit based on test scores such as AP offers the possibility of attracting strong students who already have a background in the areas we teach. Recruitment aimed at these students offers the possibility of a snowball effect—students entering a program with higher skill levels can make greater gains during their undergraduate careers, and, having a demonstrated commitment to the study of language and culture, they are likely to become effective models for other students and advocates for our programs.

「米国の大学におけるAP日本語の単位認定に関する調査と今後の課題」(AP Japanese credit acceptance: Study and future considerations)

Motoko Tabuse, Eastern Michigan University

大学進学にかかる学費及び諸費が年々増える中、全米では１２の州がAPのスコアを大学で認定するべく規定したり、法律を定めたりしている。その結果としていろいろな州で日本語を含めAPに関する単位認定ポリシーを設定するために大学関係者が集まって話し合いを行っていることが報告されている。しかし、最近のカレッジボードの調査(2013)によるとAP全教科の中で日本語の単位を認める大学の数が一番少ないという結果が出た。日本語のコースを提供している大学の数は政治学や生物学などに比べると非常に少ないとはいうものの、実際単位を認定している大学は多くない。本パネルはJapan Directoryに登録されている２１０の大学のデータとCollege Boardの検索サイトに基づいてどの大学がAP日本語の単位を認定しているのかを調べ、その調査結果を発表する。さらにその結果を元に、これからどのように認定大学を増やしていけるのか、また日本語プログラムが認定する事の利点について考査する。

「AP の学生はどのような力を身につけて大学に入ってくるのか」(The academic skills and college outcomes of AP students)

Yoshiko Mori, Georgetown University

大学側がAPの単位を認定する際に問題とするのは、APの学生が大学の期待する学力や知識を身につけているかということであろう。AP Japaneseの到達目標は、大学レベルの日本語指導を約300時間受けて到達する日本語力、もしくはACTFLのガイドラインでIntermediate LowからMidとされている。しかし、高校を卒業したばかりの大学１年生と既に２–３年大学で勉強した３、４年生とでは、知力、思考力、知的興味、学習経験などの面で同等に考えることはできない。そこで、より建設的な問題の立て方は、APを取った学生と取らなかった学生とでは、大学でのコース選択や学習成果でどのような違いがあるかということになる。

本発表では、AP Japaneseを取った学生は、取らなかった学生に比べて、言語力、学力、大学での学習行動においてどう違うかを考える。College Boardから出ている研究を概観したところ、AP Japaneseに直接関係する文献は限られていたものの、次のようなことが分かった。(1) AP Japaneseと大学の日本語コースの間にはかなりの適合性がみられる。(2) APのコースを取った学生は取らなかった学生に比べ、SATなどの学力を測るテストでの点数が高く、大学での成績や卒業率も高い。(3) AP World Languagesを取った学生は取らなかった学生に比べ、大学で言語のコースを取る確率が高く、関連する分野を専攻する確率も高い。これらの結果は、大学側にとっても、AP Japaneseを推進することで学力と学習意欲の高い学生を集めることができる、学生が上級の日本語コースを取ったり、日本語を専攻したりする確率が高まる、そのため日本語プログラムをより充実させることができるなどのメリットがあることを示唆している。

「社会人が期待する日本語能力に向けての新しいカリキュラムの構築」(Designing a new curriculum to achieve advanced level proficiency that professionals expect of our majors)

Yoshiko Saito-Abbott, California State University, Monterey Bay

キャリアを意識した日本語カリキュラムを考慮する上で、日系企業や政府関係者が日本語専攻の学生にどのぐらいの日本語能力を期待しているのかを調べた。その結果、彼らが求める日本語能力がACTFLのAdvanced Level以上であることが分かった。（斎藤・田伏　2013)。大学から日本語学習を始めた学生が４年間でAdvancedレベルに到達することは非常に難しいといわれている。しかし、大学での３００時間の日本語学習時間を想定するAP日本語プログラムを経て入学して来る学生は、入学時から３年生のクラスに編入する者もあり、比較的早くAdvancedレベルに到達するケースが報告されている。世界言語一般において、１年生から４年生に進級するにつれて、学習者の数が減少する傾向にあるが、スペイン語ではAPの学生が増えることにより、上級クラスの学習者も増え、プログラムの質の向上と安定性に貢献しているという事例が報告されている。日本語の場合も、AP日本語受験者数が毎年増加している中、APの学生がプログラムに入ってくる事によって、授業内容のレベルが向上し、プログラムが充実する事が分かってきた。本パネルでは、APの学生の能力をさらに伸ばし、社会が期待するカリキュラムと今後の課題を考える。

3:20 p.m.–5:00 p.m. — Session 4

SESSION 4-A: PEDAGOGY PANEL [MEETING ROOM 402/403]

Chair: **Fumio Watanabe**, Yamagata University

Panel Title: **「日本語習熟度を測る指標の分析および表現文型抽出ツールの開発」 (Toward Development of a Functional-expression Extraction Tool: Exploring Indices for Measuring Learners' Proficiency in Japanese)**

このパネルの目的は，日本語学習者の習熟度に関わる機能語や文型の分析を行い，習熟度の指標となりうる要素を自動抽出するツールを開発することである。これまで筆者らは，日本語読解学習支援システム『リーディング・チュウ太』の２種類の判定ツールである語彙チェッカーと文章の難易度判定ツールをもとに，日本語学習者による作文の習熟度評価の指標を探ってきたが，その結果，接続詞・接続助詞，名詞修飾節，複合動詞に着目する必要があることが分かった。そこで，これらの表現や文型が作文の中のどこで何回使われているかを自動的に示してくれる表現文型抽出ツールの開発を目指すことになった。

このパネルでは，まず，日本語母語話者および学習者による作文を比較し，これらの表現や文型使用の類似・相違点を分析する。そして，その分析結果を，表現文型抽出ツールの抽出ルールや表示項目などに活かす方法について探ることにする。作文のデータには，内容を統制した物語作文を用いる。第１発表者（渡辺文生）は，韓国語を母語とする学習者の作文における接続詞・接続助詞の使われ方を分析し，文や節のつなぎ方の特徴を探る。第２発表者（下條光明）は，英語が母語の日本語学習者による作文における名詞修飾節の使用傾向を分析する。第３発表者（藤原美保）は，英語を母語とする学習者による作文における複合動詞の使用傾向を分析する。第４発表者（川村よし子・武田知子）は，上記の分析対象となった表現や文型を自動的に抽出するシステムである表現文型抽出ツールの仕組みについて報告し，その有効な活用方法について提案する。

「日本語学習者の物語作文における接続詞・接続助詞使用をもとに習熟度を探る」 (Measuring proficiency in terms of conjunction and complementizer use: The case of written narratives by learners of Japanese)
Fumio Watanabe, Yamagata University

本発表では，日本語母語話者と韓国語を母語とする日本語学習者による物語作文における接続詞と接続助詞の使われ方を比較・対照し，学習者の日本語習熟度について考察するとともに，表現文型抽出ツールへの応用の可能性を探ることを目的とする。分析したデータは，日本語母語話者50名，中・上級日本語学習者12名がアニメーションに基づいて書いた物語作文である。

接続詞や接続助詞は，文章の結束性に関わり，文や節をつなぎ合わせて文脈の展開を明示的に表す言語表現である。日本語教育における接続詞・接続助詞に関わる指導およびその習得を対象とした研究は多く行われており（馬場　2006），そのことからも，これらの表現の習得が習熟度に深く関わっていることが分かる。南（2010）は，学習者による日本語の物語を母語話者に評定させ，テ形接続を多く含んだ物語は評定が低いのに対し，論理関係を明確にする接続表現を多く含む物語は評定が高いという結果を報告している。

本研究のデータを分析した結果，母語話者は約４割の文においてテ形接続が使われていたのに対し，学習者では約７割で使われており，学習者のテ形接続を多用する傾向が確かめられた。一方，逆接や条件を表す接続助詞は母語話者の方が多く使用していた。また，母語話者の作文には，およそ１文につき１つの従属節が使われていたが，学習者では１文あたり1.3の従属節が使われており，学習者における従属節の多用傾向が見られた。接続詞については，母語話者は順接型・逆接型・添加型・転換型の接続詞をほぼ同程度使用しているのに対し，学習者の場合「そして」「それで」など添加型の接続詞が約６割を占めていた。

「日本語作文における名詞修飾節—英語母語の学習者と日本語母語話者の比較から—」(Noun modifying clauses in Japanese written narratives: A comparative analysis of L1 English learners of Japanese and L1 Japanese)
Mitsuaki Shimojo, University at Buffalo, The State University of New York

本発表では学習者[NNS]（英語母語）15名，母語話者[NS]11名が絵に基づいて書いた日本語作文を比較し，名詞修飾節の使用における傾向を考察するとともに，表現文型抽出ツールへの応用の可能性を探る。

名詞修飾節はNNSによる習得の難しさが指摘されており，NNS特有の使用パターンが観察されてきた。構造的には，有生主名詞は修飾節主語，無生主名詞は直接目的語又は斜格が多く（Yabuki-Soh 2012），機能的には，登場人物の情報を背景的に修飾節で表す人物導入型は使われるものの，人物を主名詞にして時系列に事を連ねる談話展開型の使用はほとんどない（増田2001，奥川2011）。

本研究のデータでは，NS，NNSともに内の関係（寺村1981）の関係節と有生主名詞が多いという共通点があったが，以下の相違が観察された。NNSでは名詞修飾節が中上級学習者の作文に限られ，大部分が限定的用法であった。構造的には，主名詞は修飾節の主格，主節では主題，主格，「と」が目立った。NSでは名詞修飾節を含む述部や独立名詞句も見られたが，NNSでは例がなかった。さらに，NSでは談話展開，人物導入，前景化，提示表現や視点移動（メイナード2005）など多様な談話機能を持つが，NNSではほぼ人物導入に限られていた。これらの観察は，大学レベルの日本語教科書で扱う名詞修飾節が限定的用法や修飾節主格の主名詞が多いこと（Yabuki-Soh 2013）との関連も考えられる。

現在の表現文型抽出ツールは，談話機能の判定まではできず個々の分析は人力で行った。今後は構文解析に加え談話機能も含めた分析が可能なツールの完成が望まれる。

「日本語学習者物語作文における日本語習熟度の複合動詞使用への影響」(Influence of Japanese language proficiency on the use of compound verbs in learners' written narratives)

Miho Fujiwara, Willamette University

本発表では，日本語学習者（学習者）と日本語母語話者（母語話者）による作文での複合動詞使用の類似・相違点を分析し，学習者の日本語習熟度が複合動詞使用に与える影響を考察したうえで，複合動詞の習熟度の指標としての表現文型抽出ツールへの応用の提言を試みる。

学習者の複合動詞の理解（意味推測）においては，習熟度が影響を及ぼしていることが報告されており（谷内2010），特に語彙的複合動詞理解の困難さが示唆されている（谷地•小森　2009）。しかし，複合動詞の産出については，母語話者に比べ学習者の複合動詞の過小使用と使用複合動詞の種類の少なさが指摘されてはいるものの（陳2007），学習者の複合動詞使用と日本語習熟度の関係を調べた研究は少ない。そこで，本発表では学習者（38名）と母語話者（62名）の物語作文を用い，学習者の複合動詞の使用傾向と習熟度との関係を探った。

その結果，統語的複合動詞と語彙的複合動詞では異なる傾向があることが明らかになった。まず，統語的複合動詞の使用は学習者と母語話者間に差はなかったが，語彙的複合動詞では学習者の過小使用が観察された。また，学習者の習熟度との関係においても，両タイプの複合動詞では異なった結果となり，語彙的複合動詞の使用のみ習熟度との有意な相関関係が認められた。

「機能表現および文型に着目した表現文型抽出ツールの開発」(Preliminary development of a functional-expression extraction tool for the assessment of proficiency levels in Japanese)

Yoshiko Kawamura, Tokyo International University, and **Tomoko Takeda**, San Francisco State University

本発表では，日本語学習者の習熟度判定の支援を目的に開発した表現文型抽出ツールについて報告する。このツールは，入力文中の機能表現や複合動詞を自動抽出するシステムであり，日本語学習者の作文の特徴と習熟度の関係を探ることを目指している。

筆者らは，日本語学習者の作文習熟度の測定に，日本語読解学習支援システム『リーディング・チュウ太』の語彙チェッカーを活用する試みを行ってきた。その結果，語彙の難易度や文の難易度は，作文自体の評価にはあまり有用ではないが，学習者の日本語習熟度を測るツールとはなりうること，また，文中の接続詞・名詞修飾節・複合動詞等の使われ方に着目する必要性が明らかとなった。

今回開発した表現文型抽出ツールは，入力文を形態素解析システム『MeCab』によって単語に区切り，接続詞を含む機能表現，名詞修飾節，複合動詞等，日本語習熟度の指標となりうる要素を自動抽出するツールである。機能表現はグループ・ジャマシイ（2001）『日本語文型辞典』に準拠して抽出するが，接続詞は別に分類する。複合動詞は影山（1993）『文法と語形成』をもとに，統語的複合動詞と語彙的複合動詞を別々に抽出する。名詞修飾節は，談話データをもとに修飾節の構成要素をルール化し，これに合致したものを抽出する。抽出した語句についてはリストの形で表示し，どのような語句が何回使われているかを明らかにする。また，総文字数，総語数，総文数等も表示する。

このツールを利用して日本語学習者の作文を分析し，学習者の日本語習熟度判定のための指標を得ることができれば，このツールを日本語熟度判定システムへと発展させていくことが可能になる。

SESSION 4-B: PEDAGOGY PAPERS [MEETING ROOM 404]

Chair: **Masako Douglas**, California State University, Long Beach

「映画で学ぶ命の重さ　―上級日本語授業の取り組み― 」(What can Japanese learners learn about life through a movie?)

Yoshimi Sakakibara, University of Michigan

本研究は2011年から行われている内容重視の上級日本語クラスの実践報告である。この授業では映画「ブタがいた教室」を用い、四技能や文化・社会知識だけでなく批判的思考力の養成を目指す。視聴覚教材の「内容重視」や「批判的思考力」の実践報告は、プロジェクトや読み書き（熊谷2007等）に比べるとまだ少なく、映画教材も言語・文化面に焦点が当てられがちなため、本研究ではその新たな可能性を問う。

この映画は「教室で豚を育てて最後に食べます」という小学校教師の一言で始まる。子供達は豚の世話をしながら「食べるか否か」の議論を重ねていく。この映画を選んだ理由は、「命」という重いテーマと「食」という人間に最も近いテーマの共存により、文化社会の相違点のみならず、人間としての普遍性も話し合えること、子供達は台本がなく自らの言葉で議論すること、教育、家族、友情などのテーマもあることである。

学生はまず聴解や内容質問、意見を書く宿題をし、授業では10分程度の「ディスカッションリーダー」になる。これは宿題の質問（例：命の長さは誰が決めるのかという子供の質問にあなたならどう答えますか）を一つ担当し、意見を聞きながら議論を広げ、最後にまとめるという役割を担う。この際、クラスメートの意見を理解すると同時に、意味深い質問をすることが求められる。

学生アンケートには、授業を通して日本語能力や文化知識だけでなく、日本人の責任感や命に対する態度、動物と人間の関係、食べることと殺すことの間にある曖昧さなどを学んだという声があり、批判的思考力の養成に役立つことが窺えた。発表では授業やアンケート結果の詳細、今後の展望にも言及する。

「体系的な peer/self review の指導が書く力の向上に及ぼす効果の検証：上級日本語コースでの批判的に読み・書くことの指導にむけて」 (Effects of trained peer- and self-review on improving writing skills: Teaching how to write and read critically in an advanced Japanese class)

Masako Douglas, California State University, Long Beach

本発表は、peer、 self reviewの体系的指導が、上級日本語学習者の書く力の向上にどのような効果があるのかを調査した結果の報告である。Peer reviewについては、既存の研究では、第一言語のみならず第二言語教育でも、その効果が報告されている（Kamimura 2006; Hirose 2009: Lee 2009; Liu & Sadler 2003; Suzuki 2008; Tui & Ng 2000）。その一方で、第二言語教育においては、言語力の差によって効果が期待できない、おおざっぱなコメントしか書かない学習者がいる、pee-reviewをとりいれても効果が無かったという教師からの報告がある(Byrd 1994; Teaching Center 2013)。このような問題の原因の一つには、学習者はすでにreviewのし方を知っていて、第二言語学習にそのスキルを応用するだけであるという教師側の思い込みがあるという(Teaching Center 2013)。第二言語教育では、書きの指導と平行して、reviewのし方も指導する必要があるという指摘もある。

本研究では、Calibrated Peer Review (University of California, Los Angeles)を参考に、本研究用に改定したreview手順を用いて、体系的なpeer reviewの指導を行い、このpeer、self reviewの方法が書く力の向上に効果があるかどうかを検証した。検証方法として、大学の日本語プログラムの上級日本語コースに在籍する学習者（11名）が4種類の異なるジャンルで書いたドラフト（１から３）の質の比較、ドラフト１の直後に実施したpeer review とそれに続くself reviewで学習者が記録したコメントや評価得点の比較、ドラフト１とドラフト３の直後に学習者が記録した内省ジャーナルの分析、学期始めと学期末に実施した書く力についての学習者の自己評価の比較、学期半ばと学期末に実施したpeer review, self reviewについてのアンケート結果の比較をおこなった。本発表では、peer-reviewの書く力向上への効果についての報告に加えて、体系的peer reviewの手順の紹介、peer reviewがself reviewに及ぼした効果も報告する。

「図書館と日本語プログラムの協働による正規多読コースの実現と実践」(Development and implementation of extensive reading courses: Collaboration between the library and the Japanese language program)

Yuka Kumagai and **Tomoko Bialock**, University of Southern California

本学では2012年秋学期に課外活動としての「日本語多読クラブ」を開始、2013年秋学期からは「Extensive Reading in Japanese I, II 」という2つの正規のコースを開講するに至った。辞書を引かずに理解できるものから始めて徐々にレベルを上げながら大量のインプットを図る「多読」は、読解力だけでなく全般的な言語機能を伸ばすこと（Barnford 2004）、学習者の動機を高め自律学習を促すこと（高瀬　2012）などが報告されている。日本語教育の現場でも、日本語多読研究会の発足（2002）以来、多読を取り入れた指導法が注目されてきているが、実情は書籍の収集、場所、時間などの問題のため、多読指導の実践に至る手前で足踏みをしているケースも多い。本発表では、多読コース開講に至るまでの大学図書館と日本語プログラムの協働作業についての報告を基に、多読環境整備のための様々な可能性についての提案を行う。発表前半は図書館司書の立場から、多読コレクションの書籍、費用、スペースの獲得の方法及び、多読コースの開講が図書館の側にもたらすメリットに言及する。後半は日本語講師の立場から、開講までの大学との折衝、多読をコースとして行う意義、日本語の全般的なスキルにもたらす影響、授業の進め方、評価の仕方について議論をすすめる。多読コースは各自のレベルやペースに合わせた個人学習的な側面が大きい一方で、初級から上級までの異なるレベルの学生が混在することによる相互学習効果も生まれている。読む楽しみを発見したなどの学生たちの意見の紹介とともに、個人とクラス指導のバランス等の問題についても考察する。

“Setting up a Japanese extensive reading club based on learner motivation”

Aurora Tsai, University of Hawai’i, Manoa

This study explores the process of setting up an extra curricular Japanese Extensive Reading Club based on the motivation of three college -level, Japanese as a foreign language (JFL) learners who engaged in the extensive reading over the course of three months. I explored how JFL learners’ attitude and motivation towards reading changed over time as they engaged with a variety of Japanese comic books, children’s books, short novels, and other materials. The few existing studies on reading motivation have mainly utilized surveys to compare attitudes and motivation before and after a reading course (e.g., Robb & Susser, 1989; Takase, 2007). While survey studies help illustrate a larger, collective picture of learner characteristics and language learning behavior, researchers are starting to call for more introspective approaches, which emphasize motivation as

dynamic, complex, and situated within each learner's personal context (Ushioda, 2009). In this study, I investigated motivation by analyzing data from learner diaries and focus group interviews using grounded theory (Strauss & Corbin, 2007). The results of this study reveal 17 main factors that influenced these learners' motivation and attitude towards reading in Japanese, such as increased motivation from the freedom to choose how to study and gaining exposure to "natural" Japanese outside the classroom. During my presentation, the most prominent factors will be discussed. Results of this study may indicate a need for new extensive reading principles for Japanese learners and highlight important factors to take into consideration for the creation of new Japanese graded readers. In addition I will discuss implications for JFL classroom pedagogy and extensive reading.

SESSION 4-C: PEDAGOGY PAPERS [MEETING ROOM 407]

Chair: **Noriko Hanabusa**, University of Notre Dame

「３領域Ｘ３能力＋３連繋を指標にしたプロジェクト型学習の実践報告と今後の課題」(Designing a project based on the guideline, "Gakushuu no Meyasu : 3x3+3")

Jisuk Park and **Kyoko Matsui Loetscher**, Columbia University

グローバル化が進み、言語活動が多様化する今、我々はどんな外国語教育を目指すべきだろうか。「外国語学習のめやす」(国際文化フォーラム、2012)は、21世紀における外国語教育の目標を「総合的コミュニケーション能力」の獲得としている。そのキーコンセプトは、３領域（言語、文化、グローバル社会）における３つの能力（わかる力、できる力、つながる力）を伸ばすことにある。又そのためにさらに①学習者の関心・意欲・態度・学習スタイル、②既習内容や他教科の内容、③現実社会である教室外の人・モノ・情報をそれぞれ連繋させることが重要だとしている。本プロジェクトでは、この「３領域X３能力＋３連繋」を指標にしたプロジェクト型活動を行った。

上級の学習者を対象とし、現在の社会問題の知識を豊かにする（わかる）とともに、教室外での他者との交流を積極的に連繋させ（つながる）、他者との意見交換を通して問題解決を導く（できる）ことを目的とした。学習者が関心のある社会問題を選び、その社会問題について他者にわかりやすく説明する作品（新聞、ブログ記事／ラジオ、テレビ番組／短い映画等）をペアで作り、それを外に発信した。そして問題について他者と議論し、問題の解決法を考え、最後にその問題解決のために社会の一員として自分にできることを考えて実行した。

本発表では、学生の作品の紹介と分析、意見交換の実際の例とプロジェクト後の学生からのフィードバックなどのデータを分析し、報告する。このプロジェクトが上記の３つの能力を養うことにどう貢献できるか考察し、自律した学習者を育成する支援者としての教師の役割についても述べる。

「日米合同参加型短期サマープログラムでアメリカ人日本語学習者は何を学んだのか」(Short summer program for Japanese and US students: What did the US students learn?)

Noriko Hanabusa, University of Notre Dame

近年日本の大学では海外留学の促進が掲げられ、特に短期海外研修プログラムへの需要が高まっている（工藤　2011）。米国中西部にある筆者の勤務校でも、2年前から日本のK大学の学生を受け入れる2週間のサマープログラムが始まった。当初の開設目的は、日本人学生の英語力向上等の教育的効果であった。しかし、このプログラムは、同時に日本語クラスの学生が日本語話者と接する貴重な機会にもなる。よって日本人学生と日本語学習者が、寮で共同生活を行いながら、アメリカ研究、ESL等複数の授業や課外活動に合同で出席する形を採用した。2013年は、日本人15人、アメリカ人6人が参加した。

本発表では、期間中筆者が担当した異文化間コミュニケーション授業について報告する。学習目標は、言語その他の手段を使って協働学習に取り組むこと、言語学習をサポートし合うこと、自律学習者としての態度を養うこと等である。授業は、調理実習、英語話者へのインタビュー、口頭発表の3つのプロジェクトを軸に構成した。

園田他（2006）は、ラーニング・ジャーナルが、自己モニタリング能力の向上に効果的だと述べる。筆者の授業では、各自が事前にゴール設定を行い、期間中毎日学習日誌を提出した。アメリカ人学生が挙げたゴールは、日本語力を伸ばすことの他、日本人学生の滞在を手助けする、アメリカ文化について正しく伝える等であった。プログラム終了後、全員自己評価活動を行った。

発表では、日本語学習者の日誌等の資料を分析し、彼らが日本人との接触を通じて、日々何を感じ、吸収していったのか考察する。また、短期サマープログラム実施における運営上の課題にも言及する。

「サービスラーニングを取り入れたプロジェクトの実践報告：日本語学習者を日本文化の発信者へ」(Service learning: Transforming learners of Japanese into promoters of Japanese culture)

Yoshiro Hanai and **Shoko Emori**, University of Wisconsin, Oshkosh

本発表では、日本語学習者が初級段階から参加出来るサービスラーニングを取り入れたプロジェクトの実践報告を行う。本プロジェクトでは、日本語学習者が初級段階から、学内及び周辺地域に日本文化の魅力の一端を広めるという目的の下、和太鼓について学び、和太鼓演奏や口頭発表を通して学内外に日本文化を広めるというサービスラーニングに携わっている。和太鼓の演奏指導は日本語で行われ、学習者に授業外で実践的に日本語を使用する機会を提供する。和太鼓についての口頭発表は日本語と英語の二言語併用で行われ、学習者は各自の言語能力に合った役割を任される。また、和太鼓を取り上げたコンテントベースの日本語授業を開講し、和太鼓の知識を深め、更に日本語能力の向上を図る。学習者はこれらの経験を通し、日本語を学ぶ学習者から、日本語を使い日本文化を広める文化の発信者へと成長することが出来る。このような学習者の変化は、言語学習の最も重要な副産物の一つだと言っても過言ではないだろう。本発表では、プロジェク

トの理論的背景や目的、内容について述べた後、過去一年半の活動を例に、具体的な事例を示しながら、学習者の成長の一端やプロジェクトの成果について議論する。

サービスラーニングは近年様々な分野で注目されている教授方略であるが、外国語教育の分野におけるサービスラーニングの難しさは、提供可能なサービスが学習者の言語能力によって限定されてしまうという点にある。本プロジェクトは、このような課題を克服し、初級段階からの学習をサービスラーニングの真の目的である「社会への還元」へ結び付けるためのモデルとなると言える。

「日本語での繋がりを築く―日米二大学間での Skype プロジェクト」 (Building a connection in Japanese: Skype project between two universities in Japan and the U.S.)

Kayo Nonaka, New York University; **Sachiho Mori** and **David Reedy**, Aoyama Gakuin University

学習意欲の向上、維持のためには何ができるのか。学習者が言語習得を「楽しい」「ずっと続けて行きたい」と感じるには何が必要なのか。言語教育に携わる者なら誰もが抱く問いであろう。筆者が教鞭を執る大学は米国大都市にあり、在住日本人が多く、日本関係のイベント等には事欠かない。しかしながら、学生の教室外での日本語使用は意外に少ない。そこで、筆者はその対策として生の日本語コミュニケーションの場を与えるために日本の大学生とのSkype会話プロジェクトを計画した。

本発表は日米の二大学間で行われたSkypeを使った会話プロジェクトの実践報告である。このプロジェクトは2012年夏から現在まで、初級から中級日本語の４コースで実施。学生が各自東京にあるＡ大学の学生と一回10分から15分間Skypeを通して会話をするものである。会話は計二回、トピックはコースのレベルにより講師が予め設定。学生には決められた時間にSkypeで会話し、それを録音、講師に提出することが課された。プロジェクトの開始時の緊張感も一回目が終わると和らぎ、後のアンケートでは、学習者の大半が「楽しかった」「日本に住んでいる日本人大学生と直接話ができる機会を得、有意義だった」と述べ、「自分の会話力を直視する機会を得た」という意見もあった。また、この後もFacebookなどで交友関係を持続する学生も出た。

本発表は日米の二大学間で行われたSkypeを使った会話プロジェクトの実践報告である。このプロジェクトは2012年夏から現在まで、初級から中級日本語の４コースで実施。学生が各自東京にあるＡ大学の学生と一回10分から15分間Skypeを通して会話をするものである。会話は計二回、トピックはコースのレベルにより講師が予め設定。学生には決められた時間にSkypeで会話し、それを録音、講師に提出することが課された。プロジェクトの開始時の緊張感も一回目が終わると和らぎ、後のアンケートでは、学習者の大半が「楽しかった」「日本に住んでいる日本人大学生と直接話ができる機会を得、有意義だった」と述べ、「自分の会話力を直視する機会を得た」という意見もあった。また、この後もFacebookなどで交友関係を持続する学生も出た。

SESSION 4-D: SIG PAPERS ON JAPANESE FOR SPECIFIC PURPOSES, JAPANESE AS A HERITAGE LANGUAGE, AND STUDY ABROAD FOR FOREIGN LANGUAGE ADVANCEMENT [MEETING ROOM 408/409]

Chair: **Tomoko Takami**, University of Pennsylvania

「ビジネス日本語における仕事目標と日本語学習をつなげる試み」(An attempt to connect professional goals and Japanese language studies in Business Japanese)

Tomoko Takami, University of Pennsylvania

本発表では筆者が学部生対象のビジネス日本語コースで実践した「日本語と将来の仕事と私」というプロジェクトを報告する。これは学習者が自分自身の職業の目的と日本語学習について問い直し・考えることを目的とするプロジェクトである。筆者の勤務校では、ビジネス日本語コースを将来の職業に関連して日本語を使うことを目的とする学習者に対するコースと位置づけている。しかし、数年にわたるコース指導を通して、筆者は担当するコースの学生の多くが自分自身の職業の目的と日本語学習についてはっきりと関係づけをしないままビジネス日本語を履修する、また、日本語を使う仕事に就くことを必ずしも希望していないことに着目した。そして学習者が自身の職業の希望と日本語学習を関連付け、意識化することが重要であり、教師がその学習者の興味やニーズを理解することが効果的なカリキュラム開発に必要であると考えた。

このような考察のもと実践した「日本語と将来の仕事と私」プロジェクトは、１）学習者が仕事の希望や日本語の学習の意義について話し合い、内省を通して、自分の考えの問い直しをする、２）発表原稿をまとめ、ピアレスポンス作業を行う、３）自分の考えや結論をまとめ、パワーポイントを使った発表を行う、という「共有化」「個人化」のサイクル（牛窪2008）を含む学習者主体の活動である。

本発表では、いくつかの事例を取り上げ、学習者が本プロジェクトを通して、どのように自身の将来の職業の展望や日本語学習について考え方が深化していったかについて考察する。またこのプロジェクトのビジネス日本語コースのカリキュラム開発における意義や課題についても触れたい。

「２１世紀を生き抜くためのビジネス日本語教育：「高度の思考能力」「情報活用能力」「協働作業能力」の獲得をめざして」(Business Japanese curriculum for a new era)

Toshiko Kishimoto, Clemson University

21世紀に入りすでに10余年の年月が過ぎた。その間の急激なIT技術の進歩による時代の変化は誰しもが実感するところである。言語教育においてもパラダイム・シフトが進行し、オーデイオリンガルアプローチからコミュニカティブアプローチを経て、社会活動としての言語教育アプローチあるいはソーシャル・ネットワーキング・アプローチ（當作2013）にと

進化してきた。21世紀の言語教育には言語、文化のみならず外国語話者と社会活動を行うのに必要な文化能力、社会力などを養うことが求められているのである。筆者はソーシャル・ネットワーキング・アプローチは中上級レベルの日本語教育には必須であり、特にビジネス日本語教育こそ新しい言語教育を実践すべきであると考える。（岸本2012）グローバル社会とその繋がり、２１世紀スキルの運用を切り口にビジネス日本語教育を通して学生の文化能力、社会力の養成をするのが目標である。本発表ではクラス活動として取り上げたテーマ「日本人の集団主義志向とそれが及ぼす影響」、そして本学が毎年主宰するLanguage ＆ International Trade Conferenceのスローガンに連携させた授業活動のひとつ「トヨタ・システム」（製造業のみならず全世界の企業で幅広く採用されている生産システム）の二例を実践報告する。２１世紀を生き延びるためには「高度の思考能力」「情報活用能力」「協働作業能力」が求められている。ビジネス日本語教育を通して学生がこの三能力をどのように獲得したかを考察し、今後のビジネス日本語教育の方向性にも言及する。

「多文化・多言語社会における成人初級継承語学習者－「継承語学習者」とは誰か？」(Adult beginner-level Japanese heritage language learners: Who are 'heritage language learners'?)

Yasuko Senoo, McGill University

本発表は，カナダにおける継承日本語学習者の高等教育での再学習の可能性を探ることを目的に行った研究の一部である。カナダは，国際社会に対し多文化・多言語主義を唱え、「文化のモザイク」と呼ばれてきた（Cummins,1992）。カナダ統計局（2009）の発表によると，2006年の段階で総人口約3,100万人に対し，約40万人が母語が2つ以上のバイリンガル・マルチリンガルとされている。しかし，公用語である英・仏二言語の習得の重圧から，幼少時に継承語の習得を断念する家庭もある。近年，高等教育機関の初級レベルでこういった幼少期に日本語を習得できなかった継承語学習者が見られるようになってきた。将来的に，このような「再学習者」を教育機関や教師がどのように受け止め，学習支援していけばよいか，考えていく足がかりとして，「継承語学習者」の高等教育機関の日本語コースでの認識・位置づけについて調査した。

2012年に行った今回の調査の協力者は，カナダ東部の大学の日本語教師・ティーチングアシスタント5人である。一人1時間から2時間のインタビューを行い，自身の言語学習・指導経験，「継承語学習者」に対する認識・指導経験について語ってもらった。これらのインタビューデータをもとに，１）「継承語学習者」はどのように認識されているのか，２）その認識のもとになっている基準は何か，３）実際に「初級継承語学習者」はコースやクラスの中でどのように位置づけられているのかの3点について考察した。調査の結果，「継承語学習者」は，技能に偏りはあるものの，ある程度言語使用能力がある学習者と認識されており，初級学習者については「外国語学習者」として指導が行われていることが分かった。

"Engaging learners abroad in local communities of practice"

Lindsay Yotsukura, Kyoto Consortium for Japanese Studies

Every year many foreign language students go overseas, believing that immersion in the target language and culture ensures increased proficiency. However, due to their differing approaches toward study abroad environments (e.g., active pursuit of vs. withdrawal from interactions with local people) and easy access to the home culture, friends, and family through communication technologies, some students may not maximize study abroad opportunities (Coleman, 2013; Kinginger, 2008, 2013). This presentation reports on a project implemented in a study abroad program that promotes students' involvement in local communities in order to enhance their linguistic and cultural learning experiences.

Taking the viewpoint of foreign language learning as social practice, we have implemented a project in tandem with our Japanese language curriculum that engages students in "both the socialization required to use language and the process of socialization through language" (Roberts et al. 2001: 9). The project has involved a cumulative total of over 400 U.S. undergraduates learning intermediate- and advanced-level Japanese abroad. Students are required to participate in an activity they select with residents of local communities, and maintain membership for at least one semester.

Our presentation first outlines the project, focusing on the past five years of implementation. Then, based on our analysis of students' responses to surveys and reports, we discuss the benefits and challenges that students experience in terms of linguistic and cultural development through their interactions with local communities. For example, students have the opportunity to observe authentic interactions among group members, incorporate what they have learned in class and through the project in their own verbal/non-verbal behavior, and receive feedback in the process from local participants. As a result, many students sharpen their understanding of situated language usage, and become more confident in their ability to participate as contributing members of the community.

SESSION 4-E: LITERATURE PAPERS [MEETING ROOM 411]

Chair: **Joan Ericson**, Colorado College

"Experiencing Japanese Noh theatre through Akira Kurosawa's films"

Minae Yamamoto Savas, Bridgewater State University

This study explores the effects of Akira Kurosawa's use of Noh conventions through an analysis of Kumonosu-jō (or Throne of Blood, 1957) and Ran (1985), adaptations of Shakespeare's Macbeth and King Lear, respectively. Japanese Noh theatre is an enigma to many students in other countries. Discussing the influence of Noh on a Japanese film based on a well-known western drama makes a connection with a culture that is unfamiliar to students who have never been to Japan. Finding a familiar story within a new context not only fosters and strengthens students' intellectual ability, but also provides them with some new insights into their perspectives.

Noh theatre has a rich theatrical and aesthetic heritage that offers a doorway into Japanese history and culture. Noh plays unify and harmonize mime and dramatic elements with dance, chant, and an orchestra composed of a flute and three drums. The other critical elements involved in the performance of a Noh play are masks, robes, the mode of production, and the unique stage space in relation to the audience. These elements are intricately woven together into a harmonious whole, creating a unified aesthetic experience.

Many of the Noh plays of medieval provenance are performed to this day while going through changes reflective of shifts in patronage, audiences, and social climate. The stark simplicity in Noh was a means to express the refined beauty and nostalgia for the aristocratic culture. Such refined beauty was particularly valued during the Muromachi period (1336-1573), the seminal period for Noh theatre, which is especially celebrated as a watershed epoch for Japanese culture. The study of Noh theatre and its significance as a living art today thus not only gives us an insight into the culture of medieval Japan, but also helps us focus on certain cultural continuities bridging traditional and contemporary Japanese societies.

"The Ballad of the Shared Café? The Tale of Sagoromo in medieval song"

Charo D'Etcheverry, University of Wisconsin, Madison

Fans of court fiction know that the late Heian Tale of Sagoromo made a splash with pre-modern readers, both for the beauty of its poetry and the pathos (and occasional "unseemliness") of its plot. We also know that their responses to the tale tend to be gendered: men typically noted the verse and responded in associated modes associated (more poetry, commentaries), while, as in the Mumyôzôshi (Untitled Book, ca. 1202), women gave greater attention to character and events, and discussed them in correspondingly narrative formats. These two approaches to the tale, and to writing about it, converge in the medieval songs known as enkyoku (banquet songs) or sôka (fast/light songs), a genre that encompassed both the usual suspects (Kyoto aristocrats) and Kantô–area warriors and monks.

In this paper, I will introduce the enkyoku/sôka genre and its performative contexts, then consider two, late-thirteenth-century songs explicitly linked to The Tale of Sagoromo: Sagoromo no sode (Sagoromo's Sleeves) and Sagoromo no tsuma (Sagoromo's Hem/Wife). As earlier studies have shown, these songs reveal a carefully structured response to the tale, one that reorders or excludes major events to highlight the emotions of the hero and of Asukai, his crucially lower-born lover. These portraits emerge primarily from rhythmical pastiches of the tale's verse. However, the Sagoromo-themed songs also strongly evoke the tale's narrative contours, allowing even relative newcomers to absorb its story alongside its emotional impacts—in effect, reuniting the poetry with the plot. While this reunion has implications for Sagoromo's later reception, I will concentrate in my conclusion on the songs' historical significance, as a textual and performative moment in which the era's lesser elites—regardless of occupation—recognized themselves in both the tale and each other… and, if only for a song or two, came to terms with the likeness.

"Living in the earthquake nation: Representations of earthquakes in modern Japanese literature and film"

Chiaki Takagi, University of North Carolina, Greensboro

This paper is based on my ongoing research that was inspired by Japan's 2011 catastrophes. Now that the 2011 disasters have added another dimension to Japanese culture, it is crucial to rethink Japan as an earthquake nation and to pay close attention to the effect of earthquakes on various aspects of Japanese culture and society. Throughout its history, Japan experienced numerous large earthquakes. In the modern period, disaster prevention or "bosai" became a serious national concern; and especially with the introduction of seismology in the Meiji period, Japan's modern development cannot be discussed separately from its earthquake politics. I explore modern Japanese culture in terms of its relation to earthquakes and discuss the formation of earthquake culture through an examination of the history of earthquakes, myths and legends, and the modern media and literary representations of earthquakes.

Drawing examples from literary works including those of Haruki Murakami, Sakyo Komatsu, and Tetsuo Takashima as well as the film versions of Komatsu's Japan Sinks, I discuss how earthquakes are represented as shared experiences that bind people together. The purpose of this presentation is to offer a new aspect of modern Japan's cultural formation and to introduce a new dimension of Japanese cultural studies. I also plan to share my cultural studies course that is based on this research project as an example of "teaching post 3/11 Japan" course.

"The changing dynamics of the Zainichi in transnational Japan"

Yoshihiro Yasuhara, Carnegie Mellon University

This paper explores the changing dynamics of the notion of the zainichi (literary, "living in Japan") from a transnational perspective on contemporary Japanese literature. Historically signifying "people of Korean descent in Japan," the analysis of zainichi literature has departed from its static, binary framework such as various kinds of marginality vis-à-vis the central powers of Japan, as often seen in an application of the post-colonial theory to the study of zainichi literature. Instead, zainichi literature has not only exemplified shifting perspectives on Japan's social reality through its critical dialogues with Japanese literature, culture and society among zainichi Korean authors over generations (e.g., Kim Sok Pom to Kang Sang-jung), but also has invited a literary creativity by the emerging group of other foreign-born writers who voluntarily choose to write their novels or poems in Japanese since the publication of Levy Hideo's 1987 novella, Seijōki no kikoenai heya (A Room Where the Star-Spangled Banner Can't Be Heard).

Neglected in the current scholarship of zainichi literature both in Japan and abroad, a transnational approach to the rethinking of the literature resonates with the recent critical discourses of "minor transnationalism" as explicated by Françoise Lionnet and Shu-mei-Shih: "What is lacking in the binary model of above-and below, the utopic and the dystopic, and the global and the local is an awareness and recognition of the creative interventions that networks of minoritized cultures produce within and across national boundaries." In this context, I intend to analyze the potential for multiple identities and multicultural

communications in contemporary Japanese culture, and thereby the possibility/impossibility of Japan's transnationality comes to the fore.

SESSION 4-F: SIG PANEL ON STUDY ABROAD FOR FOREIGN LANGUAGE ADVANCEMENT [GRAND BALLROOM C]

Chair: **Mari Noda**, Ohio State University

Panel Title: **「文化重視の留学プログラム：重要言語奨学金 2013 日本インスティチュートから学ぶこと」(Culture-Heavy Study Abroad: Lessons from the 2013 Critical Language Scholarship Japan Institute Experience)**

言語の習得を目標とした夏期集中留学プログラムにおいて、教室の授業、宿題、課外活動など全ての面で言語を文化の一部と捉え、授業と課外活動の連携を図った実践の報告をする。米国務省が主催する重要言語奨学金（CLS）プログラムは、８週間の留学を通してアメリカ人学習者の言語、文化的能力を著しく向上させることを目標の一部に掲げている。2013年に姫路で行われたCLSインスティチュートでは、週20時間の日本語の授業と「課外活動」と位置づけられる文化体験、その他の時間の「宿題」などの全てを行動文化を軸に連携させることを試みた。

教師の実地指導の入らない課外の場面でこそ積極的に日本語を使用して地域の人とコミュニケーションを図る、他者の視点から状況を捉え、それを物語として伝えるなどを課題とした。本パネルでは、言語と文化の接点を能動的に増やす試みを４つの側面から報告する。

竹田は 明確な語用の授業、教室外での実体験による探求型の課題、さらにこの二つを組み合わせた応用授業をどのように展開したかを報告し、そのような仕組みが留学経験と言語学習に与えうる影響を考察する。桃原は、スキャフォルディングの重要性を浮き彫りにし、比較的低いレベルの学習者が留学環境から最大限を学ぶために、教室で行うスキャフォルディング活動の例を紹介する。鈴木は発話能力が優れていても、聞き手として会話を進めることが不得手な中級レベルの留学生に対して行った、聞き上手になるためのトレーニングについて報告し、今後の課題を提供する。ラフトは協働を通して地域の人とのコミュニケーションを促進し、プログラムへの参加意識を高める目的で行われた委員会活動について検討する。

「留学プログラムの豊かな地域環境と教室の連携: 明確化された授業と探求型授業の融合」(Connecting the rich cultural environment and the classroom in study abroad: Mixture of explicit and implicit instructions)

Yuya Takeda, Becker College

Study Abroad (SA) education for the purpose of language learning offers immersion in a rich cultural and linguistic environment. However, research on study abroad suggests that simply immersing students in a different culture/environment does not necessarily ensure positive learning outcomes. I will present a curricular model that supports students' language learning in a short-term study abroad environment through three cumulative experiences: (1) pragmatic, explicit instruction, in which students practice acting out various scenes with explicated purposes; (2) implicit instruction (also referred to as "action" instruction) that is designed to provide opportunities to apply in the field what has been acquired through explicit instruction; and (3) application/blended implicit-explicit instruction, in which the field experiences are revisited through enactment and recall narratives for revision work through explicit instruction. The model was implemented in the Japan Institute of the 2013 Critical Language Scholarship to strategically connect the requisite 20 hours per week of in-class instruction and the independent field experiences that students had. Observation of students' adaptation in linguistic and cultural areas suggests that the model can potentially have a strong impact in the following areas: (1) engagement with the target society and people, (2) linguistic and cultural adaptability toward pragmatic functions, and (3) development of self-identity within the target culture.

I will present insights gained from personal experience as an instructor and feedback from students who participated in the experience, and discuss in detail successes and failures in the implementation of the model. Suggestions for improving the overall learning experience during SA will also be highlighted.

「社会生活と言語習得: 初級レベルの留学生の場合」(Socialization and language acquisition: Cases of novice-level study abroad participants)

Hiromi Tobaru, University of Findlay

Study abroad is believed to provide the best language environment to develop students' foreign language skills, cultural knowledge, and international awareness. In theory, learners have access to a myriad of authentic contextualized opportunities to interact with native speakers in the target language. However, a study abroad context does not automatically ensure that students take advantage of these opportunities that may enhance second language (L2) acquisition. Freed's (1990) study illustrates a positive correlation between the amount of native speaker interaction outside of the classroom and L2 acquisition among learners of intermediate proficiency, but not among students of higher proficiency levels. The study suggests that effective learning styles differ according to learners' proficiency levels. Schumann (1976) argues that the acquisition of a second language becomes more difficult when the social distance between the first culture and the second culture is greater (as in the case of American learners of Japanese).

Scaffolding refers to "a process in which a more knowledgeable (or expert) speaker helps less knowledgeable (novice) learners by providing assistance" (McCormick and Donato, 2000, Spada 2006). For beginning-level learners, formal classroom instruction that scaffolds grammar, culture, and communication can help mitigate the gap between the first and second cultures, thus leading novice-level learners towards increasing their cultural competency and ability to participate in interactive opportunities in the host culture. In this presentation, I will first discuss existing literature on features of

effective scaffolding in formal instruction for L2 students. Then, using a case from a novice-level classroom in an eight-week long summer intensive study abroad program in Japan, I will present concrete examples of formal scaffolding of the language and culture to associate classroom instruction and students' out-of-class interaction.

「聞き上手訓練：留学プログラム中級クラスにおける試み」(Listening strategy training: An attempt in an intermediate-level class in a study abroad program)
Natsumi Suzuki, Purdue University

年に行われたCLS-Japanの夏期集中留学プログラムでは、報告、実践練習、読み、書きの４種類の授業を行った。学生は毎日宿題として、実践練習の授業で学んだことを活かして地域の人と様々な場面でコミュニケーションをはかり、それを報告の授業で発表をした。報告のクラスでは、実体験を教師に報告する当初の形態から、クラスメイトに報告する形態に切り替え、クラス全体がより積極的に授業に参加できるようにし、報告する側は話し上手、聞く側は聞き上手になるという明確な目的を掲げて訓練を行った。そういった授業の過程でまず明らかになったことは、発話能力は優れているため報告をすることに関してはさほど苦労していなかったのに対し、聞いた報告を元に話を膨らませたり、聞いた話に対して適切なコメントを返すなど、聞き手のスキルが不足していることである。聞き上手になるためには、ただ単にinterpretativeというだけでなく、積極的に話を引き出す、話の流れを操作する、その場にいる第３者に分かりにくそうなところや話している本人にとって曖昧な部分をクリアにしていくなど、能動的なスキルが必要である。本発表では、中級レベルのアメリカ人留学生を対象に、気配り、空気を読む、状況に応じることが重要な日本の文化を体感できる留学プログラムを通して、聞き上手になるためにどのような訓練を行ったか、また、学生にとって聞き上手になることが難しかった要因が何だったかを報告し、今後の課題を提供する。

「教室外の言語と文化習得の促進：留学生による委員会活動の実施」(Promoting language and culture learning outside of the classroom: Implementing student-led committees in study abroad)
Stephen Luft, University of Pittsburgh

In study abroad, students often fail to take full advantage of the learning opportunities available outside the classroom. This tendency can be particularly strong when students are studying as a cohort that shares the same base language. Furthermore, target-language interactions that do happen outside the classroom often occur with other students, leaving study abroad students with a somewhat narrow scope of social experience.

In order to promote meaningful target-language interactions outside of the classroom, to provide students with greater richness in their social experience during study abroad, and to engender a greater sense of program ownership, we assigned students to four committees, each with its own sphere of responsibility. The four committees were a) health and sports, b) events and community outreach, c) travel and transportation, and d) housekeeping and hotel. Each committee was chaired by a student, and overseen by an instructor in the program. Students in the committee interacted with members of the community as part of their committee activities. The instructor assigned to the committee provided linguistic and cultural coaching to students to help prepare them for these interactions. In these interactions, students acted not merely as students, but as representatives of their committee, and of the study abroad program as a whole.

Through the committee activities, students gained experience interacting with native speakers as representatives of an organization. As a result, they left the program better prepared not only for casual interactions, but also for interacting with native speakers in a professional role.

PART TWO

Juniper Ballroom, Marriott Courtyard Hotel
Mezzanine Level
Thursday, March 27, 6:00 –9:00 p.m.

General Membership Meeting (followed by light refreshments)
6:00 – 7:15 p.m.

Chair: **Motoko Tabuse,** AATJ President

Keynote Presentation

7:30 – 8:30 p.m.

Dennis Washburn (Dartmouth College)

"Un-translating the Classics: Philology, Language Teaching, and Japanese Literary Texts"

Genji monogatari has been rewritten through medieval fan fiction, fake chapters, Buddhist religious rituals, visual narratives of all sorts, product placement, erotic parodies, nationalist philological treatises, treasured picture books for trousseaus et cetera. These ' translations' have so shaped understandings of Murasaki Shikibu's masterwork that uncovering the original has become an exercise in literary excavation. This situation is hardly limited to the classics; even with modern works language teachers are constantly confronted with the task of how to recover or maintain the sense of linguistic particularity and cultural strangeness that makes text worthy of our attention in the first place. This task requires in part that we 'un-translate', focusing not merely on teaching the fundamental structures of language, but peeling away the layers of interpretation produced by a text's composition, circulation, and reception.